
星のカケラ ～戦いの幕開け～

神月雪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカケラ ～戦いの幕開け～

【Nコード】

N2162H

【作者名】

神月雪兎

【あらすじ】

およそ十年前から現れ始めた魔物の調査に、三年前に旅立った主人公真由美の兄。しかし待てど暮らせど連絡の一つなし。兄を訪ねて三千里の旅が、今始まる！

序章 遙かなる戦いの謳

そこはクリスタルで造られた塔内だった。

「やむを得ない…。クロウ、おまえを封印する！」

重苦しい雰囲気の中、沈黙を破って凜とした声が響き渡る。

声の主はとかく美しかった。華奢で色白の体。腰まで伸びた長い銀髪。何もかもを見据えたような深く澄んだ蒼い瞳。全てが、怖いくらいに綺麗だった。

彼はその鋭い瞳でじっと それを見つめていた。眼の前に在る、暗闇の存在を。くろのもの

暗闇の存在は静かに、そして男の台詞を嘲笑うかの如く、こう云った。

「貴様：本気で言っているのか？」

男の顔色が変わったのを暗闇の存在は見逃さなかった。

「俺は必ず甦る…。たとえ神であるおまえに、封印されてもだ」

「黙れ！」

男、いや神は左手に光玉を持ち、右手をその上に翳した。

「――封印！！」

神のその声と同時に、塔内は光に包まれた。

その瞬間。とき暗闇の存在は不敵な笑みを浮かべていた。

彼は知っていた。神の力の衰えを。

次に目覚める時こそ、全てが闇に還る時

暗闇の存在は、神の魔力と玉の魔力で、長く深い眠りに堕とされた。

第一章 それぞれの旅立ち — 真由美編 —

目覚めなければ。

今こそ、あの時の決着をつけなければ。

明光の存在しらのものの願い。それは暗闇の存在の 解放。

そうしうる力は充分にあった。だがあの時それをしなかったのは、自らの弱さ故だった。

情けない。それが出来るのは私だけだったというのに。

それでも、消し去ることなどできなかったのだ。彼の存在を。この想いを。

けれど、暗闇の存在にこの地を明け渡すわけにはいかない。今度こそ 解放 しなければ。全てを。その為に、その為だけに、身を持たぬ体でこの世に留まっているのだから。

——光を継ぐ者よ。我が眠りを解かんが為、現れ給え——

その朝、真由美は母と別れ、一人、旅に出た。

真っ直ぐに前だけを見て歩く。もう決めたから。兄を捜し出すまでは戻らないと。

彼女は十六才だ。茶髪のツインテール。淡いピンクのワンピースに紫の腰帯をしている。ぎゅっと結んだ唇に、彼女のこれからの覚悟が滲み出ていた。

まずは大森林の手前の町、オルンを目指す。

大森林とは、今真由美のいる東国と、これから向かう西国とを分断している、ヴァルディア大陸の中心だ。あまりに巨大なその森林は、抜けるのに裕にひと月はかかると言われている。国を跨ぐ時の最大の難関だ。

それでも西国に横行する魔物を相手にするよりはマシだろう。

魔物は今から十年近く前に大陸の西端から現れ始めた。奴らは月日が経つにつれ、少しずつ少しずつ、けれども着実に凶暴になり広範囲に進出してきている。

西国は古より科学・機械技術共に発達しており、現在までその力で魔物を退けてきた。しかしこのまま魔物の凶暴化が進めば、その力がいつまで通用するかはわからない。そうなれば、奴らが大森林を越えて自分の生まれ育ったこの東国に侵略してくるおそれもある。兄はそのことを憂いて、三年前西国に調査に行ったきり連絡一つ寄越さない。

自分が旅に出たのは兄を捜すためと、もう一つ。父から聞かされた 消された歴史 と、それを繋ぐ物語。その真実を確かめるためである。それはもしかしたら、兄の旅の原因でもあったのかもしれない。

オルンに着いたのは夜中だった。

町に入り宿を探していると、突然背後から腕を掴まれた。

「ぎゃー！ー！？」

死ぬほど驚いて振り向くと、そこには顔を紅くした中年男が立っていた。

「おお、あんた可愛いねえ。ちょいとおじさんの相手してよお」

男からはアルコールの臭いがプンプンする。

（げーっつ。…こいつ、酔ってる…）

真由美は顔を引きつらせた。

「あのー放してください」

だが男は猫なで声で

「やーだよ」

と、真由美の腕を引っ張った。

「……………」

真由美はわなわなと震え出す。

「ふっざけんなーっ！！」

そして男の腹に怒りの鉄拳を食らわした。男は悶えた。

「さーって、宿、宿」

怒りがおさまり、何事もなかったかのように立ち去ろうとする真由美。しかしそうは問屋が卸さなかった。

「おい嬢ちゃん…。やってくれんじゃねえか……」

男は酔った勢いか、腰に下げた護身用ナイフを抜いた。

「こんな時代だからと持っていたが、まさかこんなことに使うとは思わなかったぜ」

「ぎいやあーっつっ!!」

真由美は今までに出したことのない叫び声を上げた。それはそうだろう。目の前で虚ろな顔をした男が自分にナイフを向けているのだから。

殺される！

そう思った時だった。

不意に風切り音がして、髪が揺れる。その直後に乾いた金属音。

「……っ、誰だ!？」

声を荒げる男の手にナイフはなかった。地面に突き刺さっていたのだ。ナイフと――矢が。どうやらこの矢がナイフを弾き飛ばしてくれたらしい。

「女の子をいじめるなんざ、おまえも堕ちたモンだなあ?」

少し遠くで少女の声がした。男が怯えながら矢の放たれた方角を見やる。すると、東側の洋館のバルコニーに人がいた。暗がりで見えなないけれど、さっきの声の主と同一人物だろう。

「そ、その声は、まさか泉!？」

「大正解」

二人はどうやら顔見知りらしい。男は顔面蒼白で喚いた。

「畜生!覚えてろ!」

千鳥足で去っていく彼を、少女は追おうとはしなかった。

「バカな男だ……」

そう呟くと、今度は真由美に声をかけた。

「ねえ、あがつといでよ。203号室だから」

そう言われて看板を見ると、その洋館はホテルだった。自分も宿を取らなければならぬが、その前に助けてもらったお礼くらいは言わなくては。

「あ、はい」

真由美は少女の部屋へ向かった。

第一章 それぞれの旅立ち ―綾子編―

綾子は部屋の前で、助けた少女が来るのを待った。

（あの子…何でこんな時間に外なんか彷徨いてたんだろ…。家出だったら引き留めた方がいいよなあ…）

ドアによしかかり溜め息をつく。

（はあ…。ホントはそういうのってめんどくさくてやなんだけど…）
しかし放っておけないのが綾子の性格だ。

綾子は肩まで伸ばした黒髪と、少し垂れ目の黒い瞳が印象的な美少女だった。服も靴も、身に付けている物のほとんどが黒で統一され、それが一層彼女の美しさを際立たせていた。

少女が階段を上がってきて、綾子に気付き言った。

「あの…さっき助けてくれた方ですよ？」

自分より一つ二つ年上だろうか。大きな鞆を持っているのが気になる。やはり家出なのか。

「ああ…そんな大げさなモンじゃないけど。とにかく入ってよ」

綾子は彼女を部屋に通しソファに座らせ、自分はベッドに腰掛けた。

「それでさ…突然なんだけど、君、こんな時間に何やってたの？」
意を決し、単刀直入に訊く。

「ええつと…」

彼女は言いにくそうな顔をしたが、しばらくしてから切り出した。

「兄が…異変の調査に行くって、三年前に旅に出たきり連絡がなくて…。それで、西国に捜しに…」

綾子は絶句した。家出どころの騒ぎじゃない。今この時期に西国に行こうだなんて。

私はいい。西国生まれで、幼い頃から魔物の現実を見てきた。けれど彼女は違う。いくら何でも無茶だ。

言葉に詰まっていると、綾子の肩越しに声を出す者がいた。

「ちよつとあんた、それ本気で言ってるの？女の子一人でどーになる場所だと思ってるの？」

リーナだ。綾子は慌てた。

彼女はいわゆる妖精で、身長が十二、三センチ、背中には四枚羽根を有した生き物である。

ポニーテールにした黄緑色の髪。大きな緑色の瞳。それらは風の力を司る妖精に特有のものだとか。

「妖精さん？初めまして」

意外なことに、彼女は動じなかった。妖精は人々から隠れて暮らしているため、大抵の人間はその存在すら知らない。綾子もリーナに逢うまでは知らなかった。なのになぜ彼女は知っているのだろう。

「よく知ってたわね」

「うん…。お父さんが考古学者で…そういう文献があったって、前に言ってたから」

彼女の説明で納得は出来たが、これが他の人間ならこうはいかないだろう。

「あたし、リーナっていうの。あんたは？」

「関口真由美だよ」

二人は自分などお構いなしに話を進めている。

「ほら綾子も！自己紹介しなよ！」

「綾子…さん？」

「あつ、言っちゃった。じゃああたしが紹介するね。泉綾子、十四才。今あたしと二人で冒険してるんだ」

まずい。思い切りリーナのペースだ。思えば初めて逢った時からそうだった。

「おい、リーナ。今考えるべきなのは、彼女をどうするかってことだろ？そんな余計なこと喋ってる暇があるなら…」

「だからあ、自己紹介も済んだし、これで三人で旅出来るでしょ？」

「はあ!？」

——わけがわからない。リーナのこういった言動は一度や二度ではないが、ハッキリ言って理解に苦しむ。真由美も驚きの色を隠せないようだ。

「だって、そういうことでしょ？まさかこの子一人で旅させるわけ？」

「いや…それはそうなんだけど…」

何かが間違っている気がする。だが確かにリーナの言う通り、一緒に旅するのが一番いいだろう。

「…まあいいや。そういうことになったみたいなんだけど、一緒に行く？」

「二人が良ければ是非。本当は少し心細かったの」

彼女もやはり不安だったらしい。

「じゃ、決まりね！旅は道連れ世は情けってね」

仲間が増えてはしゃぐリーナと対照に、綾子は少し複雑な気分だった

た。それは綾子の旅に出た目的にあった。

その日は結局真由美も同じ部屋に泊まることになった。

二人が寝静まった後、綾子は一人、バルコニーで空を見上げた。

（あの子は…家族のこと、ちゃんと考えてんだな…）

煌めく幾千の星を眺めながら、過去に想いを馳せる。

自分が旅に出たのは十二才の時だった。きっかけは八歳の時の両親の別居だった。それまで夫婦喧嘩すら見たことのなかった自分にとって、それは酷くショックだった。

その後は父に引き取られ、道場を開き師範として剣術を教えていた彼から、誰よりも熱心に剣を学んだ。だがそれは決して父を尊敬していたからではない。むしろその逆だった。

母が出て行く時、なぜ引き留めてくれなかったのか。父に対してそんな憤りがずっとあった。

けれどそれ以上に嫌だったのは、周りの人間に振り回されている、力を持たない自分自身だった。

何でもいい。ただ、自分にも誇れるような強さが欲しかった。自分を証明したかった。

だがある日疑問を感じた。父から習った剣技で本当に強くなれるのかと。それは結局父の造り上げてきた剣技を、道を、ただなぞっているに過ぎないのではないかと。それでは私の求めている強さは得られない。

そう思い、旅に出ることを決めた。

あれからもう三年が経とうとしている。両親にはそれから一度も会っていない。

あの日、父は私が旅に出るのを止めなかった。母の時と同じように、けれど真由美が兄を心配するように、父も本当は心配してくれているかもしれない。そう思うのは希望的観測でしかないのかもしれないが。

（ま、でも…今度帰る機会があったら、顔見せるくらいはしてもいいかな）

自分はまだまだ弱くてちっぽけだけど、出会った仲間のおかげで変わるのかも。

旅の目的がまた一つ増えた。

第一章 それぞれの旅立ち ―リーナ編―

翌朝、三人はオルンを発ち大森林へ向かった。

リーナは綾子の肩の上に乗し、辺りを見回した。

大地の匂い、柔らかな風、樹木の間を入ってくる空高い陽。全て心地良かった。森で生まれ育った自分にとって、ここは故郷にいるような何とも言えぬ安堵感がある。

本当は、大好きなあの森から、仲間から、離れたくはなかった。それでも綾子に付いてきたのには列記とした理由があった。

天使に伝わる力を解放しなければならぬ時が来たからだ。神々が、千年も前から危惧していた時がきたのだ。

星の救済などと大それたことを考えているわけではない。だが予感がしたのだ。自分が出会ったこの少女こそ、解放された力を受け止める人間だと。

それに、彼女には借りがある。

人間は我々天使を妖精と呼ぶ。彼らは神々の存在を忘れ、石の存在を忘れていた。当然、千年前の争いなど知る由もない。それが神の望んだこととはいえ、人間の傲慢さ、貪欲さを許す気にはなれない。

けれど綾子は違う。

近年、人々から隠れて暮らす我々天使の存在を知り、欲に駆られた人間が 狩り を始めた。なんでも学者が研究目的に、金持ちが道楽に高く買っらしい。自分の住んでいた森にも先日狩りが入った。

天使には神々の決めた三大戒律がある。そのうちの 하나가 人間相手に属性の力（魔法）の解放を禁ず である。戒律を破れば待つのは処刑。だからリーナは狩りの標的にされた時、逃げることにできなかった。

あの時、狩りの連中が睡眠ガスを放ってきた。リーナは上空に飛んでかわそうとするが、少し吸い込んでしまった。

（やば…もうダメかも…）

宙を浮いていた体がよろける。

その時だった。綾子が狩りの男の後方から現れたのは。

彼女は男に峰打ちを喰らわせ気絶させた。そしてバランスを崩し、今にも地に落ちそうなリーナを受け止めた。

その後は眠ってしまっていて覚えていないが、目が覚めるとそこは近くの町の宿屋だった。綾子はしばらく自分を看ていてくれたらしい。

それから彼女といろいろな話をしたが、彼女には今まで見てきたどんな人間とも違う、優しさがあった。初めて、人間の認識が変わった。

本当言うと、解放云々よりただ彼女と一緒にいたかっただけなのかもしれない。

「!？」

綾子が急に立ち止まる。彼女の目線の先には男と炎天使がいた。

男は青年というにも少年というにも微妙な顔立ちで、穏やかな顔とは裏腹に、眼鏡に白衣という格好が胡散臭かった。

炎天使の少年は、炎使い特有のオレンジ色の髪と赤い瞳をしていたので、すぐにそれとわかった。

だがなぜ彼は人間と一緒にいるのだろう。

男は空を見上げていたが、こちらに気付き近づいてきた。とっさに綾子の下げているシオルダーバックに入るが、もう見つかってしまったかもしれない。

「あの、すみません…」

きた。一体何の用だというのか。

「旅の方ですよ？僕、歴史について調べているんです。もし遺跡か何かで変わった物を見たりしていたら、教えて欲しいんですけど…」

歴史というと天界歴のことだろうか。バッグの隙間から外の様子を窺う。

「僕、田中到って言います。専門は科学なんですが、気になることは放っておけないタチでして」

綾子が不審気な顔で到を見る。

「残念だけど、私はそういうのに興味なくてね。遺跡なんて行ったこともないよ」

「そうですか…」

落胆する到に、今度は真由美が尋ねた。

「その妖精さんは？」

「ああ、紹介が遅れました。彼はルシフェルといって、今わけあつて同居してるんです」

炎天使ルシフェルは黙っていた。一度だけちらりとリーナの方を見たが、すぐにそっぽを向いてしまった。

生意気そうなガキだ。多分自分より二、三年下だろう。

「あなた達も知っていたんですね。妖精の存在を。その風天使さんに逢つてからですか？」

やはりバレていた。魔気を感じることが出来る天使のルシフェルならともかく、普通の人間にこうも簡単にバレるとは。侮れない奴だ。

「私はそうだけど、真由美は父さんから聞いたんだよな？」

「お父様から……ですか？」

「うん。考古学者でいろんなこと研究してたの。古文書に、天使としてその存在が記されていたんだって。赤い瞳は炎天使なんですよ？」

ルシフェルを見ていう真由美。見られている本人は驚きを隠せない。

無理もない。自分も、彼女の父が考古学者で妖精の存在を知っているとは聞いていた。しかし天使としての存在をも知っているなんて

「あなたのお父様は……もしかして関口義信博士では……」

「そうだけど」

到は真由美の父を知っているのか、目を丸くして繰り返した。

「本当に……！？本当なんですね！？」

第一章 それぞれの旅立ち ― 到編 ―

到は半ば無理矢理彼女たちを自宅に招いた。家は先ほど居たところから数十メートルと離れていなかった。だから、森の中で話をするよりその方がいいと思ったのだ。

初めは彼女達と長話するつもりなどなかった。ただ新しい情報が有ればと思っただけで、それも大して期待していたわけではなかった。

だが状況は一変した。真由美という少女の父が、考古学の権威義信博士だと判ったから。

到は妹の裕美にコーヒーを用意させ、テーブルを挟み彼女達と向かい合わせに椅子に座った。

「あなたのお父様は大変有名な方でしてね。いくつもの価値ある論文を発表しています。おそらく学者の中で知らない人はいないでしょう。」

到はコーヒーを一口飲んで言った。

「ええ！？そんなすごい人だったの！？」

娘の真由美はぎょつとしていた。

「学者の論文は国家機密ですから、政府公認の者しか知ることはいない…。娘のあなたが知らなくても無理はありませんよ。」

それでも真由美はまだ信じられないという顔をしていた。

「あなたは政府公認なのか？」

「学者同士の情報交換のためにね。それで、あなた方を家に招いたのは、今論争を起こしている義信博士の消された歴史の真実という論文についてお聞きしたかったからなんです。何かご存知ないですか？」

真由美はもちろんだが、妖精二人の目付きが変わったのを到は見逃さなかった。

「やっぱりあの話って、今回の魔物騒動と関係が…？」

真由美もそれについては薄々感じていたようだ。だが綾子という少女は、話が見えない、きちんと説明しろと言った。

「…この世界で、あるべきはずのものがありません。なんだか解りますか？」

彼女は少し考え込んだが、すぐに首を振った。

「歴史ですよ。今から千年前の記録が、何一つ残っていないんです。西国に古くからある科学兵器は、いつ誰が何のために造ったのか、正確なことは何も解っていません。それどころかそれらの動力となるエネルギーも不明でした。故に僕達科学者は、過去とは違った科学技術を発達させて今まで魔物に対抗してきたわけです。二年前に学者達の研究で疑似エネルギーを造ることに成功するまで。それでもまだ完全に一致はしていません。何かが違うのです」

妖精二人は相変わらず黙ったままだった。それはやはり真実を知っているからなのか。

「技術自体は千五十年前までは特に発達していなかったようです。人々の生活も、王族や貴族が治め商人が暮らしを支えていたとか。しかし歴史はそこでぶつくりと途絶えます。史学者が遡ることが出来たのは、今からたった二百年前まで。ある学者は言いました。単なる偶然とは思えない。意図的に歴史を消されたのだと」

「それが消された歴史ってワケか…。で、何が魔物と関係あるんだ？」

綾子も難しい顔をした。

「実は義信博士が八年前に、消された歴史の記録が残る遺跡を発見したのです」

その遺跡はおよそ人が登ることの出来ない険しい山の中にあつた。彼が飛竜を飼っていないければ見つかることはなかっただろう。

飛竜とは、歴史が消される遙か昔から存在していた生物だ。近年では絶滅したと言われていたが、義信博士がある谷で卵を見つけ、大学の研究チームで孵化させて育てたのだ。記録を取り生態調査をした後彼が引き取ったらしい。

「遺跡の中には一冊の古文書があつたそうです。そこには 神と天使、そして七人の人間が 魔物 とそれを操る 悪魔 を封じた、とそう記されていたそうです」

「魔物と悪魔…？そいつらが、千年前にも居たつて？」

綾子は眉をひそめた。確かににわかに信じられる話ではない。けれど現実に魔物は存在する。

「もしその当時に魔物が居たのだとしたら、西国にある科学兵器もその対策のためだったのかもしれない。そして 悪魔 を封印し 魔物 が現れなくなったことで、兵器が不必要になり、動力を残さなかったのかも…」

リーナは絶句していた。そんなことまで知っているのかと、目がそういつていた。そんな彼女とは対照的に、ルシフェルは冷静な顔で自分の話を聞いている。

「神についてはわかりませんが、天使とは義信博士の言うように妖精のことではないでしょうか。古文書にも 風・炎・雷・地・水・光・闇の七つの属性天使がいた と書かれていたそうですし。そして七人の人間、魔物。悪魔とは堕天使辺りでしょう」

「なんか神話みてえだな」

「ええ。この論文が発表されたのはまだほとんど魔物がいなかった頃ですので、学者の間でも余計にそう言われたみたいですよ。けれどこんな状況になってしまったので、さすがにその論文を軽視出来ないという声が挙がってきてましてね。本人と連絡を取るうにも、僕みたいな研究者ならともかく、彼のように調査が仕事の学者は専ら放浪の旅に出ていて捕まらないんですよ。お父様から他に何か聞いていないですか？」

博士の娘である真由美はどう思っているのだろう。話を振ると彼女は思いもかけないことを言った。

「うん…。私もその話本当だと思う。その古文書見たこと有るんだけど、七人の人間と天使の使っていた武器や宝具のイラストが載っていたの。それで、その中の一つのフューカって首飾りが代々うちに伝わってるものと同じで…」

「なんですって!？」

真由美が静かに語り出すと、リーナが真っ先に声を荒げた。自分もまさかそんな物が存在するとは思っていなかった。

「お父さんが飛竜に乗っているんな土地を探索してたとき、御守り代わりにつけてたフューカの赤い宝玉が突然光り出して、一本の光の筋が現れたんだって。それでその方角に行ったらその遺跡が…。お父さんは研究機関にフューカを没収されたくなくて黙ってたみたいだけど…。偶然にしてはちょっと…」

「…うそ…。ちょっと待って、それホントに？」

リーナは明らかに動揺していた。

「え、うん…。今はお兄ちゃんが旅に出るときに持って行って、無いけど…」

「…やっぱ知ってたか」

今まで一言も口をきかなかったルシフェルが、ようやく口を開いた。

「そっだよ。ほとんど到が言った通りだよ」

第一章 それぞれの旅立ち ―ルシフェル編―

導士としての最初の役目を果たす。それは、ローグの解放。

「今から千年以上も昔のことだよ。地球に空からの落下物があつたのは」

ルシフェルは少しずつ説明を始めた。

それは真珠のように丸く、ダイヤのように光り輝く玉だった。

当時の国王がその 光玉 の研究を学者に命じる。ところが彼らは研究機関に玉を持ち帰ることが出来なかった。

触れようとした瞬間、玉から溢れ出た光と共に吹き飛ばされてしまふのだ。まるで玉が拒むかのように。

その後、何人もの人間が持ち帰ろうと挑戦するが、結果は同じことだった。

けれども数年後、人々は神の存在を見ることになる。

ある時玉の前で、一人の青年と双子の幼子が出逢う。その三人は、なぜか皆玉に触れることが出来た。青年は学者だったこともあり、早速光玉の研究に取りかかった。

研究により解ったこと。それは玉に含まれる莫大なエネルギーの存在だった。そのエネルギーは莫大故にコントロールが難しく、ほんの一握りの特殊な人間にしか使いこなせなかった。また、人によってエネルギーの具現の方向性も違っていた。

青年ノエルは結界を張ることと、異界の幻獣を召喚する力。双子の

兄ラファエルは生命の創造と封印。弟ミカエルは物質の創造と変化能力。

国王は痩せた土地や雨の降らない地域を悩みの種としていた。それを聞いたノエルは、自分達の力で自然を守るための存在を創る案を出した。王も賛成だった。

かくしてラファエルが 風・炎・雷・地・水・光・闇 の七天使を創ることに成功。ミカエルが西の島に玉を祀る塔と天使の住むための神殿を造る。そしてノエルが、悪しき者が立ち入らないように島全体に結界を張った。その活躍あって、彼らはいっしか人々から神と呼ばれるようになった。

各天使で最も魔力の高い者がそれぞれの長を務め、天界と呼ばれるその島は統一されていた。三人は彼らと玉を守りながらそこで暮らした。

だが異変が起きた。

大陸の西端から魔物が現れ始めたのだ。初めは光玉の魔力の影響で、一時的なものだと思われていた。けれども魔物の勢力は衰えず、むしろ異常なまでに凶悪になっていった。

そんな折、光天使の長シエルが気付く。

闇天使ヴァイスの様子がおかしい

だが時既に遅く、もはや彼は彼ではなかった。

彼は自らの持つ強大な闇の力に呑み込まれたのだ。闇より生まれし邪念クロウは、ヴァイスの体に乗っ取り意識を奪った。そして闇より呼び出した魔物を使って世界征服に乗り出した。

神ラファエルはクロウを倒すことは困難だと悟っていた。彼はあまりに強大な存在で、自分には千年の封印が精一杯だと。それでもまだ希望はあった。千年の後、彼の封印が解けた直後なら、完全な力は戻っていないはず…。その時に我々がもう一度力を結集させればあるいは…。

戦いの後、ラファエルは闇天使と光天使を人に造り替えた。二度と闇の力に呑み込まれる闇天使が現れないように。そして、対照の力を持つ光天使が、闇天使亡き後バランスを崩してしまわないように。ただ一人、人になることを拒んだシエルだけを除いて。

「私は最後までこの戦いを見届けたいのです。だから…私の魂を封印して下さい」

光天使の長が持つ宝具にフューカと呼ばれるものがある。黄金の台座の中央に赤い宝玉がはめられたものだ。

神はその宝具に彼女の魂を封じた。来たるべきその日に、彼女の意志を継ぐ者が眠りを解きに現れることを祈って。

しかしラファエルはクロウの封印、闇と光天使の人への造り替え、シエルの魂の封印、それらに己の精神力と玉のエネルギーを使い果たしてしまった。

ラファエルの命は尽き、玉は十二に砕けた。それは世界に歪みを招き、天界の四分の一は天上へと浮上した。

惑星を変えてしまった砕けた光玉を、人はいつしか 星のカケラと呼ぶようになる。

地上の守りについていたノエルは浮上した天界に帰ることが出来ず、

地上で人として暮らした。ラファエルと共に戦ったミカエルだけが一人天界に残り、今も神としてその地を守っている。

人が千年生きるということは通常考えられないが、天界に残った星のカケラの影響を受けたのだろう。

ルシフェルは一通り語った後、到の方を伺った。

「なるほど…あの科学兵器はやはりその時の…。ですがそんな歴史があつたなんて…」

到は納得と驚愕の、二つの心境を言葉にした。

神ラファエルは死ぬ前に、この歴史を人々の中に残すことに反対していた。千年の後、確実に現れるであろうクロウや魔物の影に怯えて生きる、そんな生活を送らせたくはないと。だからその真実を人々から全て隠し、天使である自分達に全てを託したのだ。

「それって…お兄ちゃんにはシエルって人を目覚めさせる人間で、その人と一緒にクロウを倒さなきゃいけないってこと…？なんで、そんな…」

真由美は真つ青な顔で呟く。捜している兄がそんな数奇な運命に巻き込まれていると知れば、無理もないだろう。

「…とにかく兄ちゃんを捜さなきゃだな。真由美、辛いかもしれないけど、まだ何も始まってないよ」

「僕も、ここまで聞いてしまったら他人事じゃないですしね。お供しますよ」

綾子と到が口々に言った。ただリーナだけはずっと黙りこくっていた。その沈黙の中で彼女は何を思っているのか。その真意は図りかねたが、今更何を思おうと自分達の進む道は一つしかない。

長い旅が始まる。星の存続をかけた、戦いの旅が。

第二章 回り出した齒車 ― 到編 ―

到はルシフェルの言うローグを、興味深いと思う反面ばかばかしいとも感じていた。

自分は世界を魔物から守るとか、そんなものに人生を賭けるつもりはない。正義だのなんだの、興味が無い。

いつだってそうだ。自分の行動の基準は興味があるか否か。その二つしかない。

今回の旅も純粹に真由美に協力するつもりだったわけじゃない。ルシフェルが全てを語っていないからだ。その謎とされるものが到の知的好奇心に火をつける。目の前に真実を知る手段があるのに、放っておけるはずがない。そもそも、故郷を魔物に襲われ逃げてきたルシフェルを助けたのも、興味本位と研究のためだったのだ。同居するうち情が移って、妖精の存在について尋ねづらくなっていたけれど。

森の中をただひたすらに歩く。いくら歩いても木々しか見えない。二年前、ここに住み始めた頃はよく迷ったものだ。西国には年に数回行くくらいだが、現在魔物の状況はどうなっているのだろう。先月行った時はまだ抑えきれたが。

西国から来たという綾子に尋ねようとした時、綾子がふと足を止めた。

「おい…何だアレ!？」

彼女の視線の先に目をやると、樹の陰でよくは見えなかったが、少し遠くに人がうつぶせで倒れていた。まさか息がないってわけじゃ

ないだろうな、と恐る恐る近づいてみる。

倒れていたのは長い金髪ウェーブを持つ、白フリル付きの赤いワンピースを着た子供だった。

「おい。おい!？」

綾子がすぐ傍まで行き声をかける。するとその子供はむくりと起き上がり大きな欠伸をした。

「んー、よく寝たあ」

それを見た真由美は口をあんどりと開ける。

「寝た!？こんなところで!？うつぶせで!？」

「んー…ともねえ、あんまり寝相良くないんだよねえ。あ、そおだ。お姉ちゃん達、ここどこかわかる??」

真由美を含め、皆開いた口が塞がらなかった。

「寝相の問題かよ!？」

「つーか、もしかして迷ったわけ!？」

「呆れて物も言えないわね」

ツツコミまくりの周囲をよそに、子供は澄んだ蒼い瞳で到の顔を覗き込んだ。

「ねー、お兄ちゃん達はどこに行くの??」

「ああ、僕達は西国に…」

「サイゴク??何ソレ、おもしろそう!!ともも連れてって」

その子供は無邪気に笑って言った。到はなぜか、彼女を知っているような、奇妙な感覚にとらわれた。

「何言ってるの!？あなたいくつ？」

「じゅーいち」

「ダメだって。危険すぎる」

「おうちまで送ってあげるから」

綾子と真由美は反対するが、二人は何も感じないのだろうか。

「連れて行きましょう」

「バツ、何言い出すんだよ!？」

「…彼女、なんか匂うんですよ」

到は本人に気づかれないよう小声で言った。しかし突然そんなことを言っても不審に思われるだけかもしれない。

だが意外にも

「同感だな」

ルシフェルがその子供を見て眉根を寄せた。

「あの子のまどつてる風、なんか違うしね」

リーナまで頷いたので、二人はその子供の同行を認めざるを得なかった。

「わかったよ。じゃあ君、名前は？」

「友美ってゆーのっ。よろしくねっ」

新たに仲間を加え一行は再び歩きだした。

だが一つ問題があった。友美の戦闘能力だ。どう考えてもこんな子供にあるとは思えない。

「魔物が現れたらこれを使ってください」

小型銃を渡すと友美はきよとした。

「…何コレ??」

「引き金を引くとレーザー光線が出るんです。ソーラーエネルギーを利用してあるので便利ですよ」

友美は笑顔でありがとうと言った。

「良かったな、友美。思ったよりまともそうで」

「うん!!」

綾子がじいっと銃を見る。

「失礼な!皆さん僕を何だと思ってるんですか!？」

「何って…」

「マッドサイエンティスト？」

真由美とリーナが顔を見合わせる。

「おかしいな…。爽やか学者を演じているのに」

「それが胡散臭いってことにそろそろ気付けよ」

ルシフェルにまで言われてしまった。自覚はないのだが、そう見えるのだろうか。

「それより、到君の武器がなくなるんじゃない？」

「いーんだよ。到は持ち物にはほとんど仕掛けしてあるんだから」

「そうそう。見えないところに隠し持ってるわけです」

「やっぱマッドじゃん」

「違いますっ！いいですか。僕はこう見えてもまともなんです！」

「こう見えてもって何だよ…」

一応(?) 到はこの中では最年長なのだが、年下にボロクソ言われて形無しだ。まあこれから一緒に旅をする分にはこのぐらいがちょうどいいのだろうか。

「ねえ、ともお腹空いたー」

「あんたねえ…」

友美は言動だけ見ているととても十一歳には見えない。まるで赤ん坊だ。さっきまで寝ていたにも関わらず、きつと次はこう言っただろう。「ふああ。眠いよお」と。

「じゃあこの辺で野宿するか？そろそろ暗くなってきたし、交代で見張りして寝よう」

綾子の案で、子供の友美を除いた五人で二時間ずつ見張りをする事になった。到は女性を差し置いて楽な時間を取るのは気が引けたので、中間の時間を希望した。

「到君って優しいんだね。じゃああたし最後がいいなっ」

明るく主張するリーナにルシフェルは呆れ顔だ。

「おまえって、よくも悪くも自分に正直なのな」

「ちよっとそれどーいう意味!？」

リーナを無視してルシフェルが言った。

「オレ、次の次でいいよ」

「そっか。じゃ、真由美最初やんなよ。野宿なんて慣れてないだろうしさ」

話し合い(?)の末、見張りの順番は真由美・綾子・到・ルシフェル・リーナとなった。

第二章 回りだした齒車 ― ルシフェル編 ―

ルシフェルは到と交代し見張りについた。

ルシフェルの魔法で点けた焚き火を囲み、服をたくさん着込んで横になる仲間達。彼らの寝顔を見ながら、導士としての自分の役目を考える。

導士とは 解放する者 。消された歴史Ⅱ ログの真実を。聖戦士の中に眠る力を。だけどもさか本当に兄の言った通りに、自分が導士になるなんて夢にも思わなかった。運命とはなんて皮肉なのだろう。

兄の言葉は今でも鮮明に覚えている。

『よく聞くんだ。君には世界を解放する力がある。導士として君以上の者はいないだろう。だから…私の代わりに星の救済を頼む。私では、もう誰も救えないから』

兄は気丈に振る舞った。自分にはそれがたまらなくいらしかった。『神もきつとそれを望んでいるよ。これから君には、辛く苦しい運命が待ち受けているだろう。でも負けないで。仲間を信じなさい。それが全ての力になるから』

世界の解放？導士としての役目？冗談じゃない。そんなもの、勝手に託されてたまるか。オレは、兄さんみたいに強くない。

炎天使の住む砂漠の町に、魔物が侵入してきたあの日。奴らは炎に強い魔物だった。だから炎天使の力を侮り攻めてきたのだ。

兄は自分一人が囹になり、他の者を必死で逃がした。

兄は本気で自分に世界を託そうとしたわけじゃない。そんなことはわかってる。兄一人を囿になんて出来なくて「オレも残る」と言った自分を逃がす為だったってことくらい。

『君にはまだ生きる意味がある』？

白々しい。よくもそんなことが言えたものだ。たった一人の家族も救えなかったのに。誰も救えないのはオレの方だ。

——ダメだ。つい干渉に浸ってしまった。まだ心の整理がつかない。あれからもう三カ月が経つというのに。

火がパチパチと燃える。それは暖かくて明るいけれど、闇の中ではただ寂しいだけだ。兄のように。

天使は生まれて三年で人間でいう十二歳になる。そしてそれは天使にとって成人を意味するものであり、多くの者はその頃に結婚する。第一子が十歳以上になった夫婦から順に天界へ呼ばれ、天界警護の任に就く。残された子どもは成人まで兄妹や周りの大人に育てられる。

兄は仲間内では一番強かった。だが兄はその力を天界ではなく地上に在る生命のために使うと決めていた。

『天界にいる神がクロウに破れれば、世界の破滅は避けられない。その為の天界警護は必要だ。そのことに反対はしない。だが地上に暮らす子ども達は誰が守る？彼らがいざ魔物と対峙した時、対応出来る力があるのか。私はそれが心配なんだよ』

兄のその憂いは現実のものとなってしまうた。自分達だけでは歯が立たなかった。故郷が襲われても、逃げることしかできなかった。それも、兄がいたから助かったようなもので。

性分とはいえ、兄はその生き方で幸せだったのだろうか。地上に残

るために、誰も愛さず弟のオレをも遠ざけて、最後まで独りだった。最後まで星の危機を案じていた。

悲しいくらいに孤高な人だった。

兄のために今出来ること。それは兄の意志を継ぎ、導士として世界を守ることに。たとえそれがその場しのぎの言葉だったとしても。それに、逃げて生きるのはもうたくさんだから。

いつの間にか交代の時間になっていた。寝ているリーナを揺すって起こす。

「あー、よく寝た。さて、やるかあ」

意外とあっさり起きたので驚いた。

「やりたくないってただこねるかと思った」

「何よ。あたしだってやるときゃやるのよ」

「へえ。見直したよ」

正直言つと、ただのわがまま女かと思っていたのだが。

「…一応褒め言葉として受け取っておくわ。私もあんたのこと見直したけど」

リーナは照れ隠しなのか、ぶっきらぼうに言った。どこをどう見直されたのか気になったが、彼女が嫌がりそうなので訊くのはやめた。

「それより、さっさと寝たら？あと二時間で出発よ」

「いーよ。何か目冴えちゃったし…一緒に見張ってやるよ。それにおまえ危なっかしいし」

「何ですってえ!？」

なんとなく、子供みたいな彼女を放っておけなかった。

（オレの方が年下なんだろうけど…）

あと二時間、旅立つまでの間隣にいたい。なぜか、そう思った。

第二章 回り出した齒車 綾子編

大森林の中には西国と東国の中継地点としていくつかの町があった。一行はその一つ、北西にある町ヌプカへ向かう。道中綾子は友美について考えていた。

到の言うとおり、彼女は何かある。

友美は金髪蒼眼だ。自分や到は黒髪黒眼、真由美は茶髪に茶眼。それ以外の髪や瞳の色をした人間を、綾子は見たことも聞いたこともなかった。妖精は司る属性によって髪や瞳の色が違うらしいが、彼女は人間だ。突然変異か何かだろうか。

大体到がその容姿にさして驚いてなかったのも変だ。彼は当然のようにそれを受け入れていた。

彼女は何者なのだろう。確かに名前も年も聞いたが、家はどこなのか、家族はどうしているのか、なぜあんなところにいたのかと尋ねても「んー、何でだったかなあ??」という返事が返ってくるばかりだ。

もしや記憶喪失…? だとしたらとんでもない子を拾ってしまった。これからどうしたものだろう…。めんどくさいことは嫌いなのに、なぜかどんどん巻き込まれていつてる気がする。

そうこうしているうちに町に着いた。土地の開けている西国ほどではないが、この町はなかなか大きい方だ。綾子も何度か来たことがあるが、スーパーや宿屋は勿論、武器屋や図書館まである。

ずっと歩き詰めだったし、夕べは野宿だったのだ。まだ正午で陽は高いが、今日はここでのんびりしよう。

「じゃあとりあえず宿取るか」

町へ入りホテルへ。フロントの中年女性に部屋の有無を確認する。すると女性は綾子の後ろの真由美を見て目を丸くした。

「真由美ちゃん?! 真由美ちゃんでしょ?!」

「え…: そうですけど、あの…:」

真由美自身は女性に覚えがないようで、怪訝そうな顔で答える。

「やっぱり。若い頃のお母さんそっくりなもの」

「! 母を知ってるんですか?」

「あら、真由美ちゃんは小さかったから覚えてないかしら。よく飛竜に乗って、両親と博君と遊びに来てたのよ。博君は二、三年前に『医療都市に行く途中なんだ』ってここへ来たけど、あれから具合の方はどうなの?」

(医療都市?)

というと、西国の要となる五大都市の一つである。五大都市は王都のある物質都市を中心に成り立っている。

物質都市では城下町だけあって物の流通が目覚ましく、衣類、家具、家電、雑貨、食料、武器などそこで買えない物はないと言われるほど。

そして東にはテレビ局や芸能プロダクション、雑誌社、新聞社、国立図書館などで有名な情報都市がある。そこには綾子の実家もある。

南は武術都市。古くから武芸に関する奥義書や記録が残る地で、各種様々な武芸の道場に加え、武術大学や国立武道館がある。武闘家を目指す者の聖地だ。因みに綾子の母は別居後そこに住んでいるらしい。

北は学術都市。武術都市とは対照に、古くから科学技術に長けてい

た地で、太古の科学兵器や研究所が今もなお残されている。ただし、何のためにどういった研究をしていたのか、科学兵器に使われていたエネルギーは何なのかなど、未だ解明されていない謎が多い。現在は大陸で唯一飛び級制の国立野薔薇大学院がある。本人から聞いた話によると、到はその理工学部を十四歳で卒業したらしい。小学校を卒業後通学していない綾子とは偉い違いだ。大体そんなに急いで卒業して何が楽しいのかと思う。

最後に西の医療都市。ここも古くから医療が発達してきた地で、国立総合病院や介護センター、老人ホーム、それに西国でも数少ない動物病院がある。だが、旅の途中で立ち寄るような場所ではない。

「なに、兄ちゃん体悪いの？」

「ちよつと、心臓がね。昔から入退院を繰り返してるの。病院寄つて薬もらうつもりだったんじゃないかな？」

「…っておい！旅してるどころじゃなくなね？！」

心臓が悪いのに魔物調査に行くなんて。無茶苦茶やる奴だ。

「男というのは、たとえその身が危険にさらされても探求心には勝てないものだ…って、昔誰かが言っていましたっけね」

到が本能だからしょうがないと慰める。が、本人を知る女性と真由美からは心配する様子が微塵も感じられなかった。

「博君なら大丈夫よ。断言出来るわ。彼の強運があれば」

「あの悪運は驚異的だもんね…。殺されても死ななさそうな感じだし」

（どんな人間だよ…）

だんだん会うのが怖くなってきたのは気のせいだろうか。

「部屋は301号室と302号室よ」

女性から鍵を受け取り、部屋に荷物を置きに行く。

「じゃあ当面の目的は医療都市だな。とりあえず今日は解散して自

由行動つてことで」

「異論ありません。それでは僕は図書館にでも行つてますね。ルシフェルも来ます?」

「冗談言つな。前もおまえと来たことあるけど、六時間も缶詰めだつたんだぞ」

ルシフェルはあからさまに嫌そうな態度を取つた。確かに図書館に六時間もなんて、よつぼどの本好きでないと耐えられない。綾子も特に本好きではないので、到に付き合わされたルシフェルが哀れに思えた。第一、妖精にとつて体よりも大きい本をどうやって読めというのか。それはある意味ルシフェルに対するイジメではないか。

「…それは到が悪いな」

「すみません。あの時は最新の小説が出ていたのでつい。でもやっぱり国立図書館にはかないませんね。学生時代も学者になつた今も利用しているんですが、一生かかっても読み切れないほどの蔵書数ですからね。退屈しませんよ」

「退屈しないのはおまえくらいだろ。学者のためにあるような場所だつたからな」

一般の蔵書はもとより、ありとあらゆる古文書と文献が保管されている。だが歴史的文化財のその書物は学者以外には公開されないのだ。

まあ、たとえ一般公開されたとして興味のない綾子が読むことはないだろうが。

「私は予備の剣を買おうかなと思つてるんだけど…。真由美はどうする?もし用がなかったら、悪いんだけど、食料とかの買い出し頼めない?」

「うん、いいよ。特に何もなし」

「友も行くー!!」

真由美一人に頼むつもりだったのだが、友美がせがみだす。それに便乗してリーナや、普段わがままを言わないルシフェルまでだだをこねた。

「私も行きたーい。部屋で留守番なんて嫌だからね！」

「頼むよ真由美。おとなしくしてるからさ」

真由美も初めは渋っていたが、二人を気の毒に思っただのか観念した。
「しょうがないなあ。わかったよ」

「やったあ！」

手放して喜ぶリーナだが、おとなしくしろと言って出来る性格じゃない。

「リーナ、迷惑かけんじゃねえぞ」

「子供扱いしないでよ。あたし綾子と同じ年なんだからね！」
言うだけのことが出来ればいいんだが。

「それでは真由美さん、ルシフェルを頼みますね」

「うん、任して」

こうして綾子と到、真由美達は別行動を取るようになった。

第二章 回り出した齒車 ― 真由美編 ―

スーパーで、真由美は食料品売り場を歩いていた。なるべく日持ちする物を選ばなければと考え、リーナに助言を求める。

「ねえリーナ、泉さんと旅してる時はどんなの食べて…あれ？」
鞆の中にいるはずのリーナとルシフェルがいない。

「友美、リーナ達知らない？」

「あのねー、さっきお菓子の試食コーナーのどこに行っただよ」
「はあ!？」

おとなしくすると言ったのに早速これだ。真由美は頭痛がしてきた。
「大体、友美もどうしてすぐ言わないのよ!？ったくもっ!？」

真由美は試食コーナーに急ぐが、既にそこには人だかりが出来ていた。

「ぎゃーっ!人來てるしーっ!」

食べるのに夢中な二人は、人々の好奇の視線に気がつかない。

「何、アレ…!？人形…じゃないよね!？」

「何で動いてんだ!？」

真由美は頭痛に加え目眩までしてきた。

「ちよっと二人とも!早く、こっち!」

声をかけると、ようやく事態を理解したらしい二人は慌てて真由美の鞆の中に入った。それを見届けると真由美は友美の手を引いてダッシュで店を後にした。

「あんたたちいゝ。おとなしくするって言ったでしょ!？」
「だって美味しそうだったんだもん」

反省の色のないリーナに、真由美も今度ばかりは付き合いきれないとばかりに言った。

「とにかく！泉さんのとこ連れてくから、今度はおとなしくしてるんだよ！？」

「はい」

「ルシフェルもっ。いいっ！？」

「へーへー」

二人の返事が相変わらずで少々気に食わないが、これから預けてくれば他の店で買い物する時間くらいはある。気を取り直して武器屋に行った。

「泉さんー？」

キョロキョロ辺りを見回す。すると真由美が綾子を見つけるより先に友美が

「あーっ。泉さん女の人とお話してるーっ。いいなあ、楽しそう」

と真由美の腕を引っ張り、指をさす。

その光景を見た瞬間、真由美は武器の展示されたガラスケースに頭を打ちつけてしまった。

というのも、綾子はふざけて女の子を口説いていたからだ。

「君みたいな可愛い女の子が、こんな大剣を持つもんじゃないよ。どうせならこっちの小剣にしたらどう？本当なら私がいつでも守ってあげられたらいいんだけど…」

「えーっ、やだあ。可愛くなんかないですよーっ。もう、上手なんだからあ」

「俺が嘘つくわけないだろ…」

綾子は少女の瞳をじっと見つめ、その長い髪にキスをした。
やばい。ヤバすぎる。中性的な顔立ちの見目麗しい綾子がやると、
女とわかっていても様になりすぎる。

可哀想に、少女は真つ赤な顔をしてうつむいている。真由美もリー
ナも友美も、綾子の毒牙（？）に抵抗力があるから良かったものの、
もし一人でも免疫がなかったら大変なことだ。

「ちょ、ちょつと…。もしもーし…」

力なく声をかける真由美。しかし二人の世界を作っている綾子が気
付くはずもない。かといって近寄って話しかける勇気もなかった。
ふざけているのだと思うが、端から見ても本当の同性愛のようで
ハッキリ言って気色が悪い。真由美は鳥肌を立てながら、仕方なく
到のいる図書館に向かった。

図書館で到を見つけた真由美は

「田中君！悪いんだけどやっぱりルシフェル預かって…」

と言いかけ、彼の読んでいる本の題名が目に入り絶句した。

「時限爆弾の製造法？」「毒物の種類と用途・改訂版」「あなたが
死ねば私は幸せ」

…一体どういう神経をしているのだろう。そう思わずにはいられな
かった。そんな真由美の心中を知る由もなく、到は平然と話しかけ
てくる。

「あ、真由美さん。聞いてくださいよ。コレ、最近入った本なんで
すけどちょつとイマイチなんですよ。時限爆弾なんて考え自体が古
いと思いませんか？やはり今の時代は反物質とかクリエイションエネ
ルギーですよ。陽電子砲や時空転移フィールド、それにBFSまで
存在するこの時代に、爆弾なんて」

「は…反物質…??」

高校の授業で一番科学の苦手な真由美に、科学者の話が理解出来るわけがない。

「知りませんか？簡単に言うと、相対論的量子論によって存在が予言された、反粒子による物質のことですよ。反粒子には陽電子や反陽子があつて……」

「ストップ！ストップ！もういい！」

真由美は思わず耳を塞ぐ。なんだか余計わからなくなった。そもそも相対論的量子論が何なのかさえ解らない。

「……………ねえ。今話してたのって日本語？」

「そんなに難しかったですか？僕の説明」

到はおかしいなという顔をした。まさに異文化コミュニケーションといった感じだ。会話が成り立たない。

「てゆーか、つまんねーなら借りるなよ、その本」

「本読んでないと落ち着かないんですよ。君こそどうしてここに？もう買い物終わったんですか？」

鞆から顔を覗かせたルシフェルに到が聞き返す。

「終わるわけないわよ！リーナもルシフェルも店の中うつろつくし！買い物終わるまで預かってよ！」

真由美は本来の用件を思い出してつつけんどんに言った。

「そうだったんですか。すみません。こら、ルシフェル。約束は守りなさい」

到が申し訳なさそうに謝る。しかし彼の叱責を二人は素直に受け入れない。

「オレじゃねーよ。リーナが……」

「あーっ、あたしのせいにする気ーっ？！あんだだってチョコ食べたそうな顔してたじゃない！！」

「してねーよ！」

今度は責任のなすりあいだ。到が溜め息をつく。

「どうしてチョコなんかでそんなに騒ぐんですか。いつもちゃんと買っただけでるでしょう？」

「えー！？いつももらってんの！？ズルイ！！私なんて、綾子が甘いのクライだからまだ一度も食べたことないんだよ！かといってねだるのもやだし…」

ねだるのを気にするくらいなら、人目を気にして欲しいのだが。

「だから到が持つてるかもって言おうとしたのに、おまえが勝手に勘違いして…」

「えっ、そうだったの？なーんだ。早く言ってくれば良かったのに」

リーナはかなり単純だった。先ほどの喧嘩腰の態度はどこへやら。

「とにかく、食べたらおとなしくしててくださいよ」

そう言いながら到が二人に一粒ずつチロルチョコを渡す。

「わあい。ありがとー」

「サンキュー到」

ホクホクとおいしそうに食べる二人。だがどうせ食べ終わったらまた騒ぎだすに決まっている。

「ちよつと田中君、甘やかしすぎなんじゃない？」

「まあまあ。チョコぐらいでおとなしくなるんなら安いもんじゃないですか」

「だからそれが——」

間違っていると言おうとしたが、そういえば二人ともおとなしいなと思い直し、鞆の中に目を向けた。二人は小さな寝息をたてていた。道理で静かなはずだ。

——待てよ。いくら何でも都合が良すぎないか？二人とも同時に眠るなんて。しかもチョコを食べかけにして。

「ね？だから言ったでしょう？」

到がニヤリと笑った。

「あんた…まさか睡み…」

「スイミ？」

後ろにひょっこり現れたのは友美だった。そうだ、この子がいるのをすっかり忘れていた。

到がすぐに鞆から二冊の本を出し、友美に渡す。

「友美さん。すみませんが、この本受付に返してきてもらえませんか？」

「うん、いーよ」

「ありがとうございます」

友美がいなくなるのを見届けて、到が言った。

「全く。気をつけてくださいよ。あんなにいたいけな子どもに悪影響を与えるようなことがあったらどうするんですか」

鞆の中に散らばったチョコを包み紙にくるむ彼を、真由美は

「一応自分の行動が悪影響になるって自覚、あつたんだ」

と蔑むような目で見た。

「あつ、何ですかその目は！？僕はこう見えて平和主義なんですよ！？さっきのだって睡眠誘発性香料で、人体に害は無いと立証済み…」

「ホントに！？実は睡眠薬で、二人の体の大きさ考えずに人間の分量入れたなんて言わないでよ？大量摂取すると死ぬのよアレ！」

「知ってますよそれくらい！てか常識じゃないですか！！僕がそんなに信用できないんですか！？」

「うん」

「~~~~~」

到の眉間にシワができた。やばい。言い過ぎたかも。いくら彼が胡散臭いからとはいえ、学者としてのプライドを傷つけてしまったかもしれない。

「あの…」

「あ、いたいた二人とも」

謝ろうとした矢先に綾子が友美を連れてきた。完璧にタイミングを

逃してしまった。

「真由美も来てたんだな。さっき友美に聞いたよ。剣買い終わったんだけど、二人はどう？」

「いやー、まだ買い物終わってないんだよねー」

苦笑いしながら言う真由美から事情を察して

「だろうな。リーナがおとなしくしてるわけがないと思ったんだ。途中で預けに来てくれて良かったのに」

と綾子。やっぱり気づいてなかったんだ。

「行ったよ。けど泉さん女の子と喋ってたし……」

ムツとして言ったが、綾子はきよんととして

「そんなん気にしてたの？あんなただの挨拶だろ？」
と言った。

「挨拶で髪にキスするか、フツー……」

「あ……。じゃあ営業用？アレやると得すんだよねー。物くれたり値引きしてくれたり。さっきもほら、剣選んでくれたお礼とか言っ
て一万ゴールドくれたんだぜ？太っ腹だよな。金持ちなのかな？」

綾子は万札をポケットから出して見せる。

「泉さんって意外と悪ですね」

「別にいいじゃん。くれて言ったわけじゃないんだしさ」

「それって詐欺師の言い訳と変わらないですよ」

「誰が詐欺師だって？それよりおまえこそ意外と常識派だったんだな。友美に持たせてた本、頭脳内改革と脳の構造だっけ？てつきり毒物とかの本読むんだと思ってたけど」

到は図星を指されて何も言わなかった。綾子は無言の彼を不審に思
いながら本題に戻す。

「買い物は私がしとくから、真由美は友美と部屋戻ってなよ」

綾子の申し出は正直嬉しかった。面倒が省けたというのもあるが、
金銭的にもだ。これからどのくらい旅を続けるかわからないが、金
が無ければ野垂れ死にだ。彼女のしていることを全面的に認めたわ
けではないが、背に腹は返られない。

というかむしろそんな特技があるのなら、最初から綾子が買い出しをしていれば良かったのでは、と思ったのは自分だけだろうか。

「うん、じゃあ頼むね」

閉館までいるという到にリーナとルシフェルを任せ、真由美は友美とホテルに戻った。

第二章 回り出した齒車 ―リーナ編―

（うーん…確かにこつちだと思ったんだけど……）

リーナは夕方、到に連れられ部屋に戻ってから気になることがあった。

風だ。風が、呼んでいるような気がしたのだ。

だから綾子達が寝静まった後、こつそり窓から外へ抜け出した。

しかし町中の大きな噴水広場の前で、風の気配が途切れてしまった。

「おい！何やってんだよ！？」

突然小声で怒鳴られた。いつの間にか隣にルシフェルがいる。

「…びつくりしたあ。あんたこそ何やってんのよ」

「あのな、おまえが外に出てくのが見えたから、心配してきたんだろ！」

また怒られた。リーナはなんだか自分が悪いことをしているような後ろめたさを感じた。

「あ、あたしは…、風の様子が変だったから……。それで調べに…」

「だったら他のヤツは無理でもせめてオレくらい起こせよ。いざって時のために窓少し開けてたろ？」

それはそうなのだが、昨日見張りに付き合わせたばかりなので起こしづらかったのだ。

もともと、リーナの場合気を遣う所を計り違えているが。

「だって、昨日あんまり寝てないでしょ？だから…」

「図書館で昼寝したし、オレは到の徹夜にしょっちゅう付き合ってるからいいんだよ！余計な気遣うんじゃないやねえ！おまえ女なんだぞ！？何かあったらどうすんだよ！？」

ルシフェルはものすごい剣幕で怒っている。

「べ…別に何も無いわよ」

「…綾子から聞いた。おまえ、狩りに狙われてたんだってな。またそんな目に遭ったら今度こそどうなるかわかんねえぞ。妖精は女の方が買い手が多いっていうし…」

それは初耳だ。それに確かに、狩りに狙われ捕まると思った時の恐怖感は半端じゃない。

「お…脅かさないでよ」

「脅しじゃねーよ！とにかく、これからは単独行動は厳禁だからな！」

やっとルシフェルが一息ついた。彼は本当に自分の身を案じてくれていたのだろう。

それにしても、だ。見張りの時といい、彼に頼ってばかりな気がする。自分の方が大人のはずなのだが。ルシフェルはしっかりしているし、男の子はそんなものなのだろうか。

彼は優しさも賢さも持ち合わせている。導士として選ばれたのもわかる気がするし、相棒が彼で良かったとも思う。

ただ気のせいかな、彼は時々無理して背伸びをしているように見える。

「…あんまり、無理しないでよ」

「…？なんだよいきなり」

「なんでもなーい。…ありがと。来てくれて」

「…別に」

ルシフェルは照れくさそうにボソリと言った。そんな彼がなんだか愛しく感じた。

「……つく。…ひいつく…うえ…」

「！？何…？」

微かだがしゃくり声が聞こえる。

「こっちだわ」

リーナは時計回りで噴水を調べる。すると噴水の石壁によしかかって、白髪の少女妖精が座っていた。

「う…。ひつく…ふえ…」

「ねえ、どうしたの？」

リーナは少女の顔を見て我が目を疑った。

「あ…、あんた、シルヴィア！？」

「うっ…リーナお姉ちゃ…」

後を付いてきたルシフェルが軽く目を見張る。

「こいつ…雪天使じゃねーか。ここは居住区域じゃねーはずだけど…」

「わ…私お母さんとはぐれて…」

シルヴィアはまだ半泣き状態だ。困ったことになった。進路を変更しなければ。

「急いで戻ろう。綾子達に相談しないと」

リーナは二人を連れてホテルへと引き返した。

第三章 雪国 ―綾子編―

「報告致します、ノエル様。…失礼、今はルーファウス様でしたね」
水色の髪をした女が、片膝を付いて男に告げる。

「…気にするな。私はルーファウスであり、ノエルでもあるのだから」

男は部屋の棚の上に飾られた石を手にとった。

「この石が…全ての始まりであり…終焉か。皮肉なものだ…。ただでは終わらせない。この手で望みを叶えるまでは。その為にわざわざ洞窟を魔獣に襲わせたのだから」

「イフリートの部下でしたね、その魔獣は。自らを死んだように見せかけ、陰で計画を遂行する…。素晴らしい案です。ですが、弟君のことはよろしいので？」

男は赤い瞳とオレンジの髪を持つ炎天使だったが、人と同じ身の丈で、四枚羽根の代わりに白い翼が生えていた。

男は感情を表に出さず答える。

「それも計画の一部だ。目的のためとはいえ、ルシフェルを巻き込み利用することは悪いとは思っている。しかし、早い段階で彼に導士としての素質ありと判った以上、仕方あるまい」

「あなたがそうおっしゃるのでしたらそれが最善なのでしょう。私達もあなたと同じ想いを、望みを持っています。お役に立てることがあればなんなりと」

ルーファウスはやつと少し微笑んだ。

「ありがとう。私一人の力では望みは叶えられない。だがおまえ達と一緒にならきつと…」

「ええ。必ず叶えてみせましょう。…それで報告があるのですが、現在彼らは西へは進まず、北へと進路を取る模様です。導士リーナ

の姪が母親とはぐれたので、家まで送るようです。予想外ですが…どうします?」

しばらく黙考した後、彼は言った。

「…あの周辺には氷の洞窟があつたな」

「は? はい…。氷の魔物が根城にっていて、人も天使も近づかない場所ですが…」

出し抜けに聞かれ戸惑いながら答えると、彼はほくそ笑んだ。

「それは都合がいい。そこで計画の第一段階を始動させる。おまえはそこで彼らを待つんだ」

「ですが…どうやっておびき寄せます?」

「その辺は私に任せろ。考えがある」

問題だ。大問題だ。

綾子は一人頭を抱えていた。

今朝リーナが兄の娘、つまり姪のシルヴィアという雪天使を連れてきた。母と散歩をしていた時にはぐれたらしい。放っておくわけにもいかなないので家まで送ってあげたい、とリーナに頼まれたのだ。真由美は兄を捜すという目的があるのでいい返事をしないのではないか、とも思ったが、意外にもあっさりOKした。自分も到も断る理由がなかったので、リーナの要望に添うことにした。

道中リーナは種族の遺伝法則を教えてくれた。

「通常異種族間で生まれた子らは父母のどちらかの属性を受け継ぐ。

しかし稀に、水と風の種族間に限り雪の属性を持つことがある」

「また、天使には種族によってある程度の居住指定区域があり、雪天使の場合、その多くが北国の寒冷地帯である」

つまり、シルヴィアの実家も北国だということだ。

雪の降る地を歩きながら綾子は憂鬱になった。なぜなら自分は寒いのが大の苦手だからだ。

まだ十月だというのに季節外れの黒コートを着ているのも、魔物に襲われたときの防具用というよりは寒さを凌ぐためだった。

黒い色を選んだのも太陽熱を吸収しやすいからという理由である。

それほど寒さが苦手な自分に北国の寒さが耐えられるだろうか。心なしか、段々険しい雪山に入っていく気がする。はあ。

「何ですか、辛気くさい……」

「綾子寒いのだめだもんね」

「そういう時人間って不便だよな」

炎天使のルシフェルは暑いのは勿論平気だし、寒さも自身が体に熱気を保つことでカバー出来る、と彼は言った。しかし、人間にそんな芸当が出来るわけもない。

「でも不便を感じるからこそ、我々人類はここまで文明を発達させることが出来たんです。無駄だと思うことでも、何かに繋がる系になる。僕はそう思いますね」

「……?ともよくわかんない」

「大人になれば解りますよ」

「……天野君ってホント学者気質だよね」

綾子はイライラしていた。寒い。寒すぎる。学者の思考を聞いている余裕など、とてもない。彼らは平気なのだろうか。

「天野さあ、そんなかつこで寒くないのか?」

ポロシャツと綿パンの上に白衣姿。見てるこっちが寒くなってくる。

「フツ。この白衣、温度調節自由自在なんですよ」

「へえー。なんかおもしろいねっ」

と笑って言う友美はミニのワンピースだ。

「お前もピンピンしてるな…」

「子どもは風の子なんだよっ」

風どころか吹雪いているのだが。

「あたしは上着着てるから平気」

真由美が喋り終わると、いきなり前から強風が起こった。冷気が肌に当たる。

「…くっ」

「おいおい、綾子相当キツそうだな。大丈夫か？」

ルシフェルが心配そうに声をかける。

「だ…大丈夫…じゃないかも」

もう少し踏ん張りたいと思うのだが、体が前に進まない。

「…しょうがねえな。まだ使ったことないんだけど、あれ試すか」

「——炎魔壁！」

彼がなにやら呪文を唱えると、綾子の体は赤い光に包まれた。

「…な、何だコレ!？」

驚く綾子にルシフェルが説明する。

「炎の防御呪文の応用だよ。しばらくはオレと同じように、周りの熱気が体を包んでくれる」

そういえば、なんだか体が暖かくなってきた。

「サンキュー、ルシフェル」

「おう。真由美とリーナにもかけてやるよ」

「ほんと？ありがとー」

「あたしはいいわ」

リーナは何故か断った。

「けどおまえ、道案内するのにずっと外にいるだろ？遠慮すんなっ

て」

いつも鞆の中にいるリーナは、今回はずっと先頭を飛んでいる。彼はそんなリーナを氣遣ったのだ。

「そ、そこまで言うなら……」

リーナは渋々承知した。そして魔法をかけてもらった後、悔しそうに言った。

「あ、あたしは！こんなことくらいであんたのこと認めないんだからね！」

「はあ？おまえ何言ってるんだ？」

ルシフェルはイマイチ意味が掴めないようだったが、綾子はピンときた。おそらくリーナはルシフェルに少なからず好意を抱いているのだろう。だが、彼女の性格上素直に認められないのかもしれない。

「男が女を助けるのは当然だろ？第一おまえとは同じ導士だし、何かあったら守ってやつから」

「なっ、何クサイこと言ってるのよ！それに私、そんなに弱くないんだから！」

「そーゆーことじゃねえよ！おまえ危なっかしいんだよ！敵から不意打ち喰らうタイプだ絶対」

「絶対って何よ！」

二人の言い合いの最中、綾子は何やらただならぬ氣配を感じた。

（後ろか！？）

直感的に振り向くと、かなり離れてはいるが後方に何か見える。多分魔物だろう。

「ちっ、このクソ寒い時に……」

綾子は西国のほとんどの魔物を一人で倒せる剣の腕前なので、大抵の魔物なら勝つ自信がある。しかし体の動きが鈍っている時に戦うのは面倒以外の何物でもない。

その上世界中を旅しているといっても雪国は例外だったので、どん

な魔物が出るか知れたものじゃない。

（つーかここ、まだ大森林なのに…。北の方ではもう侵略が始まってるんだな…）

真由美の兄・博が世界を憂いていたのがわかる気がする。

綾子は剣を抜き、構えた。

「みんな、敵だ！気をつけろ！」

第三章 雪国 ― 真由美編 ―

真由美は我が目を疑った。

確かにそれは魔物だった。そう、雪だるまの姿をした。

「わぁいつ。雪だるまさんだぁーっ。一緒に遊ぼう！」

友美は目を輝かせている。シルヴィアがすぐ止めに入った。

「やめなよ。あれ、スノーマンっていう魔物なんだよ」

真由美は実戦は初めてだ。それゆえ綾子が魔物を見つけた時緊張で死にそうだった。それがいざ近づいてくるとあんな姿だ。正直拍子抜けだ。

「しっかし魔物の姿が雪だるまとは……」

「なんか情けない戦闘シーンになりそうですね」

「なりそうじゃなくなってるって完璧！」

「どうやら真由美以外は全く動じていないようだ。」

「雪国だから雪だるまのお化けがいてもおかしくないか」

綾子は一人で納得している。

「どうでもいいけど戦わねえのかよ」

少しの間に魔物はもうそこまで迫ってきている。

数は六体。ちよっと多いかも……。でもやるしかない！

「はぁっ！」

綾子が雪だるまを頭と胴体部分で切り離す。動きが速い。やはり旅をし続けていただけはある。一瞬の動作で彼女の腕前が相当のものだと解る。

真由美も向かってくる魔物に回し蹴りを喰らわす。するとどうしたことか、蹴りを入れた頭の部分が溶け始めた。

「なに……？」

「あ、それ炎魔壁の熱気だよ。身を守るだけじゃなく、格闘系の攻

撃にも威力を発揮するんだ」

答えながら、ルシフェルはファイアーの呪文を唱える。雪だるまはあつというまに溶けて消えた。

リーナも風圧で一体を吹き飛ばし粉々にする。

「さてと」

到は一息置いて眼鏡の留め金を触る。次の瞬間、レンズから出た光線が雪だるまの体を貫いた。

真由美はぎよつとした。前から胡散臭い男だったが、まさか眼鏡から光線なんて。

「な、な、なんなのあんたは!？」

「へ?…ああ、これですか。僕の隠し武器の一つです。目はいいんで度が入ってないんですよ、これ」

到は事も無げに言った。

「一つって何よ、一つって!! あーびっくりした。他にもあんなのがあるかと思うと心臓持たないっつの」

「え、ここって感心するところじゃないんですか!？」

「違うわよバカ!!」

真由美は話に夢中でもう一体が友美の前へ来ていることに気がつかなかった。

「友美、危ない!!」

綾子が叫んだその時、友美は右手を挙げ白い光を作り出し、その手を魔物の方へ向けた。

光は瞬時に魔物に向かい接触する。と同時に魔物の姿は跡形もなく消えていた。

「…え? 今友美…何したの?」

友美の瞳はいつもの無邪気なものではなく、相手を睨み付けるような鋭い眼光だった。

今まで彼女について深く考えたことはない。しかし今回、初めて彼

女の存在に疑問を持った。彼女は誰なのだろう？　そういえば初対面の時『匂う』と言っていた。

思い返ししながら友美を凝視すると、彼女は手を下ろし目を閉じた。そして再び目を開けた時には、瞳はいつものそれに戻っていた。

「あれえ？　雪だるまさんは？」

自分のしたことを覚えていないのだろうか。真由美は混乱してきた。何がどうなっているのだろうか。

「…魔物も倒したことですし、進みますか」

到の一言ではっとする。そうだ、今はシルヴィアを送るのが先だ。

「そうだね。行こう」

第三章 雪国 ―リーナ編―

リーナは溜め息をついた。

「何だよ。綾子の次はおまえかよ」

「えっ、何でもないよ」

慌てて否定する。

「解った。お腹空いたんだろ」

「いやいや、眠いんですよ」

「きつと暇なんだよ」

どうせものすごく単純なことなんだろう、と言わんばかりの台詞を吐かれ、リーナは半分頭に來た。

「ちがっ！」

「じゃあなんだよ」

ルシフェルに聞かれ、リーナはしどろもどろになった。自分の口からは言いづらい。特に彼には。

「えーっとね…、兄さんちょっと変わった人なの。だからルシフェルは会わない方がいいわ。林に着いたら隠れてね」

「？何でオレだけ？」

当然ルシフェルは聞き返す。だがゆっくり説明している場合じゃない。雪天使の住む林まではもう目と鼻の先だ。

「いいから早く隠れて！」

無理矢理到の鞆の中にルシフェルを押し込む。

そして少し進むと林が見えた。急いで林の前まで行くと、兄と義姉が立っていた。

「パパ！ママ！」

シルヴィアが二人の元へ飛んでいった。兄と義姉は交互に娘を抱きしめた。

「まったく…。心配かけて…。リーナ、おまえがシルヴィアを連れ

てきてくれることは風が教えてくれた。悪かったな、迷惑かけて」

「ううん。久しぶりね、レイ兄さん」

「そうだな…一年ぶりか。そちらの方達は？」

兄は人間の綾子達を見て聞いた。

「彼らは今一緒に旅してる仲間。多分意志を継ぐ者。みんな、紹介するね。レイ兄さんとエリア義姉さん」

「初めまして」

挨拶を返した到を見て、レイは小さく呟いた。

「なるほどな…」

兄のその言葉の続きは聞けなかった。

「?どうかしたの？」

「いや…。そういやさっきから炎の魔力をプンプン感じるが…」

レイの顔色が変わる。

「まさか…男なんてことはないだろうな!？」

ついに聞かれてしまった。勘の鋭い兄を誤魔化すのは至難の業だが、かといってあっさり喋るのも忍びない。

「気のせいよ、気のせい」

リーナが取り繕うとするも、友美が言った。

「それってルシフェルのことー??」

「ちよっ!」

兄がその言葉を聞き逃すわけがなかった。

「ルシフェル…?やはり男か!出てこい不届き者ー!」

その大声で、ルシフェルは鞆から顔を出した。

「なんだよ、うるせーな…」

「ルシフェル出ちゃダメー!」

「あ？」

「そこかつ!」

レイはすかさず呪文の構えを取る。

「くらえっ、ウィンドカッター!」

放たれた無数の風の刃が、到が背負っている鞆を引き裂いた。

「わーっ、わーっ!!」

到が叫ぶ。鞆はビリビリ破け、中身がドサドサと地面に落ちた。

「あ…っ、危ないじゃないですか!!」

一歩間違えれば自分が切り裂かれていたのだ。彼が驚くのも無理はない。とつさに鞆から脱出し助かったルシフェルも目を剥いている。

「な…っ、何すんだいきなり!!」

「ちっ、外したか。闘いから逃げるとは男の風上にも置けないな」

「不意打ちしといて何言いやがる!!」

はあ。自分の思っていた通りになってしまった。

「な…なんだ、どうなってんだ?」

「兄さん、父さん代わりに私を育ててくれたから、私の傍に男がいると悔しいのよ」

「そんな理由で僕まで巻き添え食ったんですか!?!」

二人の攻防はまだ続いている。得意のウィンドカッターを連発しながら兄は憤慨した。

「失礼だな!ちゃんと加減している。でなければ、おまえごとき人間などとうに死んでいるわ!」

その隙を突いてルシフェルが反撃にでる。

「エルファイアー!」

「フン」

兄はその攻撃をひらりとかわし背後に回った。

「まだまだだな」

「くっそお!」

振り返り、再度攻撃しようとするルシフェル。

「ちよっと、二人共いい加減に」

「やめてーっ」

真由美が止めに入ろうとしたときシルヴィアが叫んだ。

「お兄ちゃんも…パパも…ケンカしないでよお…」

彼女は泣き出した。

「わかった、わかったから泣くんじゃない」

兄は娘の元へと飛んでいった。なんだかんだやっても一児の父なのだ。

「ケンカっつーか、あいつが仕掛けてきたんだけどな…」

ルシフェルは怒り冷めやらぬようだ。付き合っているのならともかく、ただ傍にいるというだけで不興を買って、その上攻撃されたとあっては誰だって『ふざけるなこの野郎』と思うだろう。

「そうですよ、あなた。大人気ないことはやめてください」
義姉が今頃になって注意する。もつと早く止めてくれれば良かったのに。

勿論自分もすぐにも止めたかったのだが、以前逆上されたことがあったので止めに入りづらかったのだ。

「そうだわ、あなた…」

「うむ。わかってる」

レイはコホンと一つ咳払いをした。

「実はな…氷の洞窟に行ってもらいたいんだ」

鞆から落ちた道具を拾っていた到が手を止める。

「どういうことですか？」

「魔物がいるという噂でな。人間達に何か起きる前に、この地を守る我々が調査し全滅させなければ。…だが一つ問題が」

「その洞窟にいる氷の魔物を相手にするには、私達水や雪の属性じや力不足なのよね」

氷に有効な攻撃手段は炎だ。

「…つまりルシフェルの力が必要なのね」

「……………」

兄はどうしても認めたくないに見える。素直じゃないのは自分と一緒だ。

「案内ならオレがしてやるよ」
不意に声がした。いつからいたのか、林の奥に赤髪の少年が立っていた。

第三章 雪国 ― 到編 ―

「オレはチエイニー。つっても名前も姿も仮で、本当はミカエルっていうんだけど」

ミカエル…？と言うと、変化の術を得意とした、双子の神の片割れ…？

到は訝しんで聞いた。

「どうして変化なんてしているんですか？」

「え？ああ、こっちのが気に入ってるんだよ」

ニコニコと楽しそうに話す彼に調子が狂う。

しかし神というのは本当だろう。今まで何故か違和感を感じなかったのだが、よくよく考えれば赤髪の人間など聞いたことがない。そしてそれは友美の金髪蒼眼にも言えることだ。

先ほど放った力からも、彼女が普通ではないことがわかる。彼女自身は自分の行動を覚えていないようだったが、記憶喪失と言うよりは多重人格の症状に近い気がする。

ルシフェルの話だと目の前にいるミカエル以外の神は死んだらしい。しかし、新たに神の力を持つ人間が生まれてきた可能性は否定できない。

「友美」と「神の力」が別の人格として成長してきたと考えれば、今までのことも辻褄が合う。

気がかりなのは、何故彼女を知っているような感覚がするのかだ。蒼い瞳を、懐かしく思う理由がわからない。

「とも…この人知ってる…」

「え…？」

真由美の後ろに隠れていた友美が、チエイニーの前に出る。

「どこだったっけなあ？」

「おまえ…まさか」

チエイニーも友美の蒼い瞳を凝視した。

「どうしたの？知り合い？」

真由美の問いに彼は答えなかった。

「とにかく洞窟に行かなきゃな」

チエイニーはボロボロの到や鞆や道具を一カ所に集め、右手をかざす。

「レテ」

呪文を唱えると、それらは光に包まれ修復された。チエイニーが到に手渡した時、それらは元通りというよりはまるで新品だった。

「さ、準備万端だ。ワープするからみんな集まって」

どうやら転移魔法で洞窟に行くらしい。

「行くよ。ユル！」

次の瞬間、到達は氷で出来た洞窟の前に立っていた。

「よし、これでまともに話が出来るな。天使達がいたんじゃない話しくらくてしょうがねえ」

「え、何ということ？」

「…はめられた…ってことですか？」

いくらなんでも話の展開が早すぎる。シルヴィアを送り届けてすぐに「洞窟に行け」などと。

「多分な。ついさっきあの周辺でカケラの魔力を感じてね。カケラつてのは在るだけで魔力が感じられる。けど、その魔力は一瞬で消えちまった。この世でカケラに触れてなおかつそんなことが出来るのはノエルだけだ。おそらくカケラ自体に結界を張って、魔力を小さく抑えたんだろう。魔石程度の結界なら感じることは困難だからな」

「でも、ノエルさんは死んだはずじゃあ…」

「カケラを探し持ってて生き残ったんだろ。今結界を解いたのは俺をおびき寄せるためだ。カケラの魔力に気づけば、神であるオレは地上に来る。そして予めおまえらをここに行かせるよう天使達を使い仕組ませておく。これで役者が揃うってわけだ」

チエイニーは苦々しく吐き捨てた。

「私達がここに来ることを、知ってたって言うの？」

リーナが目を丸くする。到達がここに来たのは全くの偶然だ。それすら知っていたというのか。

「あいつは召喚獣を従わせてる。調べさせることくらい、わけないさ」

「…だとしても、何が目的なんだ？」

尋ねた綾子にチエイニーはヤケになって言った。

「そこまで知ってたら苦労しねえよ。昔からあいつは何考えてるかわかんない奴だったからな。リズのことだって、宇宙天使そらのことだって、オレらには何も教えなかった。結局オレらはいいつの手の上で踊らされてるだけに過ぎないんだよ」

リズ…？宇宙天使…？何のことだろう。ノエルとは一体どんな人間だったんだ？

オレらというのは双子の神のことだろうが、同じ神でもノエルは彼らとは違う存在だったのか。

「この中に入るかはおまえらが決めることだ。おまえらが行くならオレも行く。どうする？」

チエイニーはそう言って洞窟の中に目をやった。

「僕は興味ありますね。この中に何があるのか」

「そうだね。売られたケンカは買わなくちゃ」

「行くだけ行ってみるか」

「あたしはみんなが行くなら行くー」

「おれも」

「なんかおもしろそうだねっ」

とりあえず全員の意見が一致した。

「そう来なくちゃな。そんじゃ、さっさと行って終わらせるか」

チエイニーが洞窟に足を踏み入れる。その後を、一行も続く。この

先に何があるかも知らず…

第三章 雪国 ―ルシフェル編―

洞窟の中は天井も壁も床も、その名の通り全てが氷で出来ていた。天使の自分とリーナはともかく、地に足をつけて歩く人間は進むのが大変そうだな。

「ちよつと待つてよー。天野君何でそんな歩くの速いわけ？」

人間の中でも到は割りと平気そうに歩いていた。大方靴に細工でもしてあるのだろう。

「ああ、夏冬兼用になるようにスパイクつけてるんですよ。あと、ここのボタンでローラースケートにも出来ます。それから…」
「やっぱり。」

「もういいよ」

聞いた自分がバカだったという態度の真由美。またやってると思いながら進んでいると、先頭のチェイニーが足を止めた。

「魔物の気配だ。気をつける」

全員に緊張が走る。辺りを見渡すと、前方にハリネズミ姿の氷の魔物が数匹潜んでいた。

「氷か…。私の剣じゃ敵しいな」

「私の格闘も、あの針と氷じゃ…」

綾子と真由美が口々に言った。リーナの魔法も風圧を操る程度のもので、期待は出来ない。友美は論外だしチェイニーは元々攻撃タイプではない。こうなれば到と自分の炎魔法が頼りだ。

ルシフェルはファイアーを唱える。しかしそれだけでは火力が足らずに何匹か倒し損ねるだろう。本当は上級魔法のエルファイアーを唱えたいところだが、皆にかけた炎魔壁と先刻のレイとの攻防でかなりの魔力を消耗していた。

（オレの魔力もいつまで持つか…）

そう心配していると、リーナが自分の放った火球に向かってウイン

ドを重ねた。火球は風に煽られ猛スピードで魔物に突進する。火力を増したエルファイアー級の威力で。魔物が跡形もなく消えたのは言うまでもない。

「風の使い方ってのはこういうのもあるのよ」

リーナは得意気に言った。

（そっか…。一人で倒す必要はないんだよな）

思えば今まで、一人でみんなを守ろうとばかり考えていたかも知れない。兄とのがあつて以来、誰も守れないのは、助けられないのは嫌だったから。

だけど、誰かを守ることで救われていたのはオレの方だったんだ、きっと。

そうして兄の言った自分の生きる意味を必死で探していたんだ。だけど、本当はそんなもの必要なくて。

「ルシフェル、あまり無茶はしないことです。もうあまり魔力がないんじゃないですか？」

こうして自分を拾ってくれて、気遣ってくれる到に出会えたこと。

そして今多くの仲間と知り合えたこと。それだけでオレはここに存在しているから。

だから、導士として全ての解放を。

オレが存在出来る場所を守るために。今度は一人でじゃなく、リーナと共に。

「…そうだな、魔力はないけど…でも元気出てきた」

「？よくわかりませんが、それは良かった」

到は深くは聞かなかった。そういうところは彼のいいところだと思う。

到はふと鞆からプラ容器とガラス瓶を取り出した。そしてプラ容器の中身―透明な液体―をガラス瓶に移す。

「何やってんだ」

「即席の武器をね。僕もそろそろ役に立たないと」

瓶の口に紙を詰め、ライターで火を付ける。そして再び現れた魔物に投げつけた。たちまち火は業火となり数匹の魔物を飲み込んでいく。

「何、中何入ってたの？」

「アルコールですよ。いやあ、うまくいつて良かった」

到の性格だからやると言えばやるのはわかっていたが、真由美や綾子は到の行動にまだ慣れていない。

「何でアルコールなんか持ち歩いてるんだよ」

綾子が不思議な顔をして到を見る。聞くだけ野暮だ。

「アルコールは消毒用で、瓶は何か採取した時の保存用です。これは僕の七つ道具の二つで」

「まだあんの！？」

到が言い終わらないうちに真由美がげえつと声を出す。

「おまえ、いつもそんなん持ち歩いてんのか？」

チエイニーも信じられないという顔だ。

「ええ。それがどうかしたんですか？」

「……」

学者の性分が平気にさせているのかもしれないが、自分だったらそんな荷物を持ちたくない全員が目で言っていた。

その時だった。背後から女の声が聞こえたのは。

「雑魚相手に健闘しているようですね。そろそろ私の相手もしてもらいましょうか」

「誰だっ！？」

ルシフェルは振り向き、突如現れた女をまじまじと見た。羽がなく人間と同じ背格好をしているが、水色の長髪や彼女から感じる魔力。おそらく彼女は…

「召喚獣シヴァ。ノエルの差し金だな」

チエイニーが確かめるように口にする。

召喚獣は本来は獣だが、普段は人間と天使の中間の姿をとっている。そしてその召喚獣を呼び出せるのは歴史上ノエルだけ。ということ

は、やはり彼は今も生きているのだろう。

「…ミカエル様。あなたならわかりでしょう？あの方が何をしようとなさっているか…」

「…ああ。今、やっとわかった。あいつは、目的のためなら手段は選ばない。だからおまえが来たんだな？」

「そういうことです」

「どういうことだ？ノエルは自分たちに敵対しているというのか？」

「では、行きますよ」

シヴァが右手を挙げ、呪文の構えをとる。

「待つて！どうして戦わなきゃいけないの！？私達が戦うべき相手は別にいるでしょ！？」

真由美が声を張り上げる。しかしシヴァは冷たく言った。

「ノエル様の指示です。それ以外にどんな理由が必要だと？」

「そんな…」

「お喋りはここまでです。もう私達には時間がありません」

シヴァは空に魔法陣を描き、幾筋もの細く尖った氷を放つ。自分とリーナ、チエイニーは保持している魔力である程度の防御が可能だが真由美達は魔法をもろに喰らってしまった。

服を裂き皮膚を切り裂かれ、体中から血が滴り落ちている。炎魔壁の効果も切れてきているのだろう。でなければ、少しなりダメージを抑えられるはずだ。

「そう簡単にやられるか！」

チエイニーが右手を挙げると、瞬時に全員の傷が回復した。

「そうよ！私はお兄ちゃんに会ったから！」

「女を斬りたくはないが、仕方ねえな」

真由美と綾子がシヴァの元へ走り出した。綾子が剣を抜き斬りつけようとする。

「はああっ！」

いける。綾子の剣術ならば、シヴァとて無傷では済まないだろう。真由美も横から蹴りを入れる。

が、二人の攻撃がシヴァに届くことはなかった。

攻撃が当たる寸前、彼女の作り出した吹雪で思い切り吹き飛ばされたからだ。

「う…」

「くそ…」

体をいやというほど氷の床に打ちつけて、二人は立ち上がるのがやっとだった。それだけでなくこの寒さで体の動きが鈍っている。長期戦になればなるほどこちらが不利だ。かといって打開策がない限り状況は変わらない。自分の魔法も撃ててあと一・二発。一体どうすれば…。

「あらあら。もう終わりですか？では今すぐ楽にしてあげます」

シヴァはまたも氷の魔法を放つ。初めの一撃より氷の大きさ、数共に増やして。

（加減してたつてのか…！？いくらなんでもあんなの喰らったら…）
せめて自分の魔法で相殺しようと思文を唱えようとする。

しかしそれは女の声で遮られた。

「まで。おまえは魔力を温存してろ」

「！？」

喋っているのは友美だった。

「来る…か」

シヴァの放った氷が物凄い勢いで向かってくる。そして仲間達にぶつかるとギリギリのところで友美は右手を挙げた。

「バデ」

全員を覆う光のドームが現れた。氷は光の壁に当たると消滅していった。

「…何？この壁…」

「バリア…の一種だと思います」

ただただ驚く真由美に到が答えた。

「やっぱりそうか」

チエイニーは一人何かに頷いた。

「……さて。どうするシヴァ。これ以上ここにおいても無意味だと思
うが？」

友美は蒼い瞳をシヴァに向けた。

「そうですね。私の目的はもう果たしました。またお会いすること
もあるでしょうが、今日はこれで」

そう言い残すと、彼女は転移魔法で主の元へ還っていった。

第四章 謎の行方 ― 真由美編 ―

「え…なに？なにがどうなって…」

真由美は混乱していた。召喚獣シヴァ。神ノエルの配下が何故自分達を襲うのか。そして友美の正体とは何なのか。疑問ばかりが頭を巡る。

チエイニーが真由美に回復呪文をかけてくれる時、友美が突然前のめりになった。傍にいた到が間一髪で彼女の体を支える。

「おい、大丈夫か！？」

「ええ…。眠っています」

「また寝たの！？」

ハッキリ言って、友美は旅をしている時以外はほとんど寝ている。昨日もしっかり半日は寝たはずだが。

「そうか…。まだ戻らないんだな」

チエイニーだけが驚きもせず落胆した。

「？何が戻らないの？」

聞き返したが、彼は手当てを終えて話題を変えた。

「何でもないよ。そうだ、おまえらにこれやるよ」

天使二人にベビーチヨコを二丁三粒渡す。何で神の彼がそんなものを持っているのか甚だ疑問だ。まさか天界に売ってるわけじゃあるまいし、わざわざ買いに行ったのか。大体何故にチヨコ。

「ちよつと！こんな時にチヨコなんて」

「ん？おまえらの分もあるぞ？」

「リーナと一緒にしないでよ！そういうこと言ってんじゃないわよ！」

こっちは真剣なのに、大事なことは何一つ教えてくれない。はぐらかされてる気がする。

「何よ、失礼ね。私そんなにがつついてないわよ！」

絶対嘘だ、と真由美は思った。一体どの口が言うんだか。

「まあ、いーんじゃん？甘いものは体にいいって言うし。私は食べないけど」

綾子も真由美が休憩を反対したと思ったらいい。それにしても、旅を共にして思ったのだが、綾子は結構流されやすい。

「黒崎さん、甘いものが疲れに効くって言うのは嘘なんですよ。甘いものは糖分が高いから胃に負担がかかるし、逆に疲労感が溜まってしまうんです。精神的にという意味では効果はありますが、それも一時的なものですし、第一チョコには食物麻薬と呼ばれるように常習性があるって、中毒にかかる恐れが……」

でた。到の長話が。真由美のこめかみに青筋が浮かぶ。断っておくがその怒りは到の長話のせいではない。

「とか言いながら食べるなー！！」

到がうんちくを言いながらも左腕で友美を抱え、右手でチェイニーからもらったチョコを食べているからだ。

「いやあ、懐かしいなあと思って。ベビーチョコ。それにそんなこと言ったら食べられるものなんかなくなってしましますよ」

「だったら余計なこと言わないでよ！！」

「僕はあくまで知識として……」

「知らない方が幸せなこともあるのー！！」

口論になりかけた時、チェイニーが話を遮った。

「おまえら、次はどこへ行くつもりだ？ついでだし転移させてやるよ」

「そうですね。友美さんを早く休ませてあげないと」

「リーナ達も魔力ないしな」

綾子の言葉にチェイニーが疑問符を浮かべた。

「？何言ってるんだ？もう回復しただろが」

——へ？

「知らないのか？天使の魔力回復にはチョコが効くんだよ」

「は！？聞いてないよそんなこと！！」

リーナがチョコに興味があるのは知ってたが、そんな効果があるな

んて夢にも思わなかった。

「あ、そうなの？じゃあ綾子、今度町に着いたらいっぱい買つて」

チヨコを買ってもらえる大義名分が出来たリーナは全く遠慮しなかった。

「……。しょうがねえな」

リーナのチヨコへの執着心に半ば呆れながら承諾する綾子。いつも振り回されて可哀想だなと少し同情する。

「てゆうかよくそれでやってこれたな。念のため持ってけよ」

チエイニーからチヨコを受け取り、次の目的地、西国の五大都市近くの森に転移させてもらう。その時既に動く影があると知らずに。

「ただいま戻りました」

「ご苦労だった。彼らの様子は？」

部屋に現れたシヴァにルーファウスが問う。シヴァは微笑をもらした。

「もうすぐ……かと。ミカエル様も我らの本当の目的には気付いておられないようです」

「そうか。それさえうまくいけばあとは何の問題もない。だがぐずぐずしている暇はない。計画の進行が遅れている。一度で完遂出来とは思っていないかったが、彼らが私の元に辿り着く前になんとかしなければ」

誰にも計画の邪魔はさせない。友美の中に眠るラファエルの記憶を、必ず甦らせてみせる。それが、あの娘を目覚めさせるために必要なことだから。

「ええ。それなんです、彼らは先ほど五大都市付近の森に転移しています。もう一度私が行って来ましょうか？」

シヴァが指示を仰ぐと、雷獣ライラが現れた。

「ルーファウス様、今度は私に行かせて。私だって楽しみにしてる

のよ。あの娘が目覚めるのを。封印が解けた時、聞かせてあげられる武勇伝の一つくらいなきや、つまらないじゃない」

胸が痛む。確かに私達は誰もがあの娘の目覚めを望んでいる。だがあの娘は違う。あの娘はあの暗い部屋で、眠り続けることを選ぶだろう。たとえ幾千の昼を越え、幾万の夜が流れても。何もない白い夢をみながら、この世に在り続けるだろう。そんな彼女を目覚めさせることは単なる自分のエゴでしかない。

「でも…、あなたは好戦的だから手加減できるか心配だわ」

「えーっ。手加減しなきゃダメなの？」

ルーファウスは二人に解らぬように小さく首を振った。

——しっかりしなければ。誰かを犠牲にしてもあの娘を甦らせる。そう誓ったのだから。今の自分が存在するよりもっとずっと以前から、それは定められたことだったのだから。そして自分はその為に生まれてきたのだから。既に後戻りできないところまで来ている。今更引き返せないのだ。

「…いいだろう。ライラ、行って来なさい。シヴァは少し休んでいるんだ」

シヴァの言う通りライラは好戦的ではあるが、同時に引き際もわきまえている。それに少しくらい本気を出した方が、ラファエルの記憶も戻るかもしれない。

「やった！じゃ、行って来んね」

ライラが行った後、シヴァが不安そうに訊いてきた。

「ライラが気に障ることを言ったのでは？」

「…何故そう思う？」

「辛そうに見えます」

シヴァに嘘はつけない。長く傍にいた分、すぐに見抜かれてしまう。

「…ライラのせいというのは違うよ。ただ、自分の汚さを思い知っただけさ。もう、純粹に平和を望んでいたあの頃には戻れないということを」

シヴアは何も言わなかった。

第四章 謎の行方 ―リーナ編―

「エルウィンド！」

リーナは風圧で巨大ウサギを吹き飛ばした。森に着いた途端出くわしたのだが、シヴァのような召喚獣ならともかく、そこらの魔物は自分達の敵ではない。さっさと倒してしまおう。

次の呪文の構えに移るリーナ。しかし、視界に入ってきた光とバキバキという音で手が止まる。何だろうと音のする方向に目を向けると、いつの間にか起きたのか、寝ていたはずの友美が銃を天に向け引き金を引いていた。天に向かって放たれたレーザーは、友美の真上に飛び出ていた木の枝を折り彼女の頭に落としていた。

「うわーんっ。痛いよおっ」

友美は泣き出した。彼女は一体何がしたかったのだろう。

「あのー、友美さん？何で空に銃を？」

到が慰めるでもなく聞く。子ども相手に冷たい奴だ。

「だって…徒競走で先生、こうやるもん。だから…」

「……………」

返す言葉が見つからない。十一歳とはいえあまりにも子ども過ぎる思考ではないだろうか。

「友美さん、これはここを倒したい敵に向けて撃つんですよ。ほら、こういう風に…」

到が友美の手を取り、一緒に銃口を合わせる。

「へー、そうなんだっ！ーうん、わかった。こうでしょ？」

友美がまたも勝手に引き金を引く。レーザーは今度は魔物と戦っている綾子の元へ逸れた。

「！！？」

叫ぶより先に思わず目をつぶってしまった。
ドシュッ。

鈍い音がした。レーザーの命中した音だ。綾子は！？無事！？

恐る恐る目を開けると、綾子は尻餅をついていた。どうやら怪我はないようだ。傷を負っていたのはむしろ魔物の方だった。友美の攻撃を受けたのだろう。綾子の隣でぐったりと横たわり、背中から血を流している。

「び、びつくりさせんなよ友美!!」

綾子は胸に手を当てた。ルシフェルに事の顛末を聞くと、綾子がレーザーに当たる直前絶妙のタイミングで、真由美がその魔物を綾子の方へ蹴り飛ばしたとのことだった。魔物は綾子と激突し、綾子も後方へ飛ばされた。そしてその直後、綾子の立っていた位置に押し出されたその魔物にレーザーが命中したというわけだ。

「ごつめーん、黒崎さん! 私ちゃんと周り見てなくて…。次からは気をつけるから!」

どうやら狙ってやったわけではないらしい。

真由美は必死に謝っているが、そのお陰で命拾いをした綾子は怒るに怒れない。生返事をしたあと怒りの矛先を到に向けた。

「やっぱり友美に銃を持たせるのが間違이었다んだよ!! おまえが使った方が役に立つんだし、要は私らが友美を守れば済む話なんだからさ!」

「そうだよ。それに友美ってばピンチになるといきなり強くなるし」

真由美の言葉で皆の空気が変わった。

「そういえば、ノエルさんのやろうとしていることにも関係してるみたいだったよね。これ以上いても無意味とかって」

「ノエルと召喚獣…か。これで終わりって感じじゃねえな。なんかまだありそうな気がするぜ」

ルシフェルの呟きに答えるように、声がした。

「よくわかったわね。次の相手は私。雷獣ライラ。よろしくね」

――上だ。樹の太枝に座っている。紫の髪に黒い瞳の少女。彼女もノエルの手先なのか。

ライラは喜色満面で言った。

「私はシヴァみたいに手加減しないわ。せいぜい死なない程度にがんばってね」

そして地上に降りて呪文を発動させてきた。

第四章 謎の行方 ― 到編 ―

ライラと名乗る召喚獣は右手を前に突き出した。

バリバリバリッ。

荒れ狂う稲妻が仲間達を襲う。

「…………ッ」

「…くっ」

例によって魔法耐性のない綾子と真由美は、かなりのダメージを受けた。 到は空気中の電流を集める性質の石を持っている。今の雷もその石が吸収してくれたので無傷で済んだ。しかしこれ以上大きな雷が来ると、さすがに集めきれないかもしれない。

（まあ、万ーそうなったとしても他に手はあるんですけどね…）

「なめんな！」

綾子が傷ついた体でライラに走り寄る。本当に怪我をしているのかと思わせるほど、素早い動きで剣を振るう。

「残念でした」

ライラは綾子の剣に雷球をぶつける。そして刃が粉々になったのを確認する間もなく第二撃を放ってきた。腹部に感電による火傷を負い倒れる綾子。

「綾子！」

「うそ…」

リーナと真由美は真っ青になって震えていた。

—— 無意味な抵抗をするからこういうことになるんだ。ノエル目的は僕らではないのに。

彼らの目的は、友美の中に眠る“ラファエル”の記憶を呼び覚ますこと。カケラを持っている事を隠していたのに、今回一瞬でもその魔気を放出したのは、自分の存在をチェイニーに気付かせるため。そうすれば必ずチェイニーは僕らと洞窟へ来ると予測していた。そ

うしてシヴァの攻撃から僕らを守っていたんだ。いくらラファエルの記憶を取り戻すために友美を叩いても、僕達を殺すわけにいかないから。そうしてまんまとラファエルの人格を呼び出した。目的を果たしたシヴァはその場を退いた。

だがラファエルの人格は完全に戻ってはいなかった。だからライラを仕掛けてきたんだろう。

今回チエイニーがいなくても来たところを見ると、前回ラファエルの人格が現れたことで余裕が出来たのかもしれない。「あと少し叩けば完全に戻るだろう。わざわざチエイニーという護衛をつけなくても」と。それに「時間がない」と言っていたことも関係しているのかもしれない。

とりあえずは、反撃しなければライラもそれなりにしか攻撃してこないだろう。それにラファエルの人格についても興味がある。

ノエルがなぜそれが必要としているのかは見当もつかない。彼の都合に自分が巻き込まれたことに対する不満も少なからずある。だがそれ以上に知的好奇心の方が勝るのだ。

ラファエルがどんな人間だったのか。本当に世界を創造する力があつたのか。千年前とはどんな時代だったのか。彼の人格が戻ればその全てが明らかになる。そう思うと気分が高揚してくる。少しくらい怪我をしたとして、そんなことは全く問題にならない。真実を知る代償としてはむしろ安いくらいだ。

（ま、追い払うことも出来るんですけど…もう少し茶番に付き合うとするか。久々に面白いモノがみれそうだし）

怪我をしている仲間がいるのに不謹慎だがそう思った。

そして実際ライラは予想外の言葉を口にした。

「あーあつ、全然弱っちいじゃん。つまんなーい。人間はともかく、天使二人には期待してたんだけどなー。ルーファウス様の弟だってても大したことないんだね。こんな電撃で手こずるようじゃ」

「何…だつて？」

ルシフェルがどうもくする。

「兄さんと……知り合いなのか!？」

肩の傷口を押さえながら、ライラに問う。

「知ってるも何も、この計画の発案者は彼だもの」

ライラから聞かされた驚愕の事実、ルシフェルは「嘘だ」と叫んだ。

「だって兄さんは」

「生きてるわよ? ていうかそもそもあの襲撃も、私達が仕組んだものだったのよ」

「……!?! 兄貴がそんなことする必要があつたとでも?」

話が怪しくなってきた。ルシフェルは故郷を魔物に襲われ逃げたと言っていた。だがそれすらも、この一連の事件と関係しているというのか。

「だって、計画を実行するのに周りに人がいたらやりづらいでしょう? だから出てつてもらつたの。安心して。誰も殺さなかったから」

その言葉に天使二人がキレた。

「ふざけんなよ……。殺さなきゃ、何してもいいって思ってたのかよ!?!」

「そうよ! 黙って聞いてりゃ、あんた何様のつもり!?!」

二人の合体魔法が発動した。リーナの風がルシフェルの炎に加速を付ける。あの速度なら避けることは無理だろうが、彼女も相殺くらいには持ち込んでくるだろう。

「文句ならルーファウス様に言つてよー」

到の予想が的中した。いや、それよりもっと最悪だ。ライラは綾子に放った時と比べものにならない大きさの雷球を投げつけてきたのだ。それは、留まるところを知らない勢いでこちらに突進してきた。

——とはいえ、あれだけ質量があると移動にも負荷がかかる。回避は可能。少なくとも自分と天使二人は。問題は倒れている綾子と腰を抜かしている真由美。

到は一瞬で情報をまとめ、白衣のポケットから銃を取り出す。引き

金を引き、雷球に向けてエネルギー砲を撃ち込んでやった。するとそれに呼応するかのように、白い光の矢が同時に雷球を貫いた。何が起きたのかはすぐに察しがついた。こんな事が出来るのは友美しかない。

「…いい加減にして欲しいな」

友美が冷たく響く声で言った。

「あなたの記憶が一度で戻れば済む話だったのよ。今度こそ、ちゃんと戻ったんでしょね？」

「おかげでな。他に用もないだろう？おまえはもう還るんだ」

やはり彼らの目的はラファエルの記憶…。しかし何か腑に落ちない。「言われなくても還るわよ。ところで弟君。私達の期待を裏切らないように頑張ってね」

それだけ告げると、ライラはいやにあっさり還ってしまった。

「…大丈夫か？」

友美——いやラファエルは、綾子の傍に駆け寄った。酷い出血と火傷の跡を見て、彼は蒼くなった。

「動くなよ。今すぐ回復を…」

彼が呪文を唱えると、綾子の体は光に包まれあつという間に傷が塞がった。今まで息も絶え絶えだったのが嘘のようだ。

「はあ。助かったよ。にしてもすげーな、魔法って」

綾子は素直に感想を述べてから、何か考える素振りをした。そして真っ直ぐラファエルの瞳を見つめた。

「なあ、あんた…誰？あいつらとどんな関係が？」

ラファエルはゆっくりと口を開いた。

「友美はラファエルの生まれ変わりだ。通常魔力や霊力の高い者は、来世でもその力を保持し、同時に前世での記憶を持つ者も多い。だが彼女は前世での記憶を友美自身と切り離し、別人格化してしまった。そのラファエルの記憶を持つ人格が私だ」

「別人格化…って、なんでそんな」

「友美さんが思い出したくないからですか？前世で起きたことを」

言った後で、激しく後悔した。ラファエルは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「……全てが間違いだっただ。多くの者の人生を狂わせてしまった私の罪は、消えることはない。例えばこうして来世を生きても」

「後悔……してるんですか？ヴァイスさんを救えなかったこと」

「……それだけじゃない」

彼は呟くように言った。気にはなつたがそれ以上訊くのは躊躇われた。綾子もそう思ったのか、話を変えた。

「あの召喚獣は？あんたの記憶を取り戻そうとしてたみてえだけど」

「友美はなるべく私を出さないようにしていたからな。だから西国へ来る途中、森の中で友美と代わって……。だが友美の状態でクロウを倒すのは無理だ。だから彼らは……。ルーファウスはおそらくノエルの生まれ変わりだろう」

その名にルシフェルが反応する。

「なんで……故郷を襲ったりなんか……。方法なんて、他にいくらでも……」

「それは、君に導士としての素質を見いだしたからじゃないのか？」

「あんなの、出任せだ！」

「出任せじゃない。ノエルは隠し事をしたことはあっても、嘘をついたことは一度もない。実際に君は立派に務めを果たしている。だが、そういう状況でなければ引き受けなかったんじゃないか？兄の方が適役だ、と」

「それは……」

確かにそういう風にも取れる。しかしそれが全ての真実とは思えない。チェイニーの言うように、自分達は彼の手の上で踊らされているに過ぎない。そう出来るだけの頭脳の持ち主なのだ、彼は。

「世界を救うために導士の存在は必須だ。彼も沢山悩んでの結論だったんじゃないか？」

「……………」

「そつだよ！自分のお兄ちゃんなんだもん、信じようよ！」

「うんうん、そんで会ったら一発ぶん殴る！」

「えー…殴るんですか？」

「だってー、ルシフェルを悲しませたことに変わりないじゃん」

「…だな。会ったら殴っとくか」

ルシフェルはやつと少し笑った。

確証がないから何も言えないが、ルーファウスには何か他に目的がある気がする。自分はラファエルほど彼を信用出来ない。

——また何か…起こるな。

到はそう思っただった。

第四章 謎の行方 ―綾子編―

一行は五大都市へ向かっていた。

あの後すぐにラファエルは友美に戻った。

『今回のことで、私の記憶は完全なものとなった。だが友美が認めない限り、これからも二つの人格が交わることはない。無論、有事の際にはおまえ達を助けるが、主人格は友美だ。私が表に出ることは出来ない』

そう言つてうなだれるラファエル。彼自身、今の人格である友美に辛い思いをさせたくないという気持ちと、いつまでも二つの人格で生きるわけにはいかないという、二つの葛藤で苦しんでいるのだろう。どうするのが正しい選択なのか、綾子にもわからない。

「ぎゃー！ちよつとあれ！」

「？」

後ろにいた真由美が叫ぶ。振り向くと、後方に数体魔物が迫ってきている。反射的に剣を抜くが、到がそれを制した。

「放つといても大丈夫ですよ」

「？どういう…」

その刹那、巨大な光の矢が無数に飛来し、魔獣を絶命させていく。

「なっ…」

倒れている魔獣は一体二体ではない。消えていく光の矢を見て綾子は目を丸くした。

「なんなんだ…？」

「対魔物用戦闘兵器ですよ。学術都市の誇る科学技術の結晶です」
そう言えば前に到が言っていたな。それに綾子も学術都市の古代兵器の存在は知っている。それにしてもこんな強力な兵器を復活させるなんて。自分が旅に出ていた間に随分変わってしまった。

「わーいつ。街だあ、街ー！！」

友美がニコニコしながら駆けてゆく。しかし街に入る直前、何かに

ゴツンと体をぶつけ泣き出した。

「うええんっ。痛いよおっ」

「おまえ…何とぶつかったんだよ」

近寄ってみるが特に怪しいものはない。

「何にもないよねえ…？」

真由美も首を傾げる。

「皆さん、よく見てくださいよ」

到がコンコンと空を叩いた。綾子は目を瞬いた。なんで何も無いのに音が鳴る？

目を凝らしてよく見ると、透明な壁がドームのように五大都市全体を包んでいた。

「な、なんだありや!？」

「あれも対魔物用の侵入防止装置、バリアフィールドシステム、通称BFSです」

「へー。それでどうやって中に入るの？」

「今パスワード入力しますから、ちよつと待ってください」

到は鞆から小さなパソコンを取り出した。

「それで調べんのか？」

「学者の場合、交付される特殊コンピューターである程度の国家機密情報を閲覧できるんです。このパスワードも一般人は見れないんですよ」

「?じゃあ一般の奴は中に入れねえのか？」

「元々中にいた人なら自由に行き来できるんですよ。僕らは外の間ですよ」

到の説明によると、このBFSは街から外へ出る人間がいなければ解除する必要はないのだが、こんなご時世でも外へ出る人間がいるのだそう。そしてその多くは学者と商人なんだとか。

学者は国に研究の成果を報告する義務があり、国は研究助成のため、彼らに様々な権利を与える。今回のパスワードを知る権利もそうだが一般人はそういうわけにもいかない。ある程度国が出国に関し

て管理しなければならないのだ。彼らの場合は市役所で出国手続きをしなければならぬ。これがまた面倒臭い。保証人は必要だし、パスワードを記した紙をもらっても、そのパスワードは3ヶ月に一度は更新される。つまり、その間に戻ってきて新しいパスワードをもらわないと、五大都市内には入れなくなるのだ。

「僕が仲間にいて良かったでしょう？」

得意気な顔をして、パソコンをいじる手を止める。

「えーと。今回のパスワードは“かぼちやのスープ”です」

「はあ？誰が考えたんだよ」

まるで子どもが好きな食べ物で決めたような言葉だ。

「一応パスワードは学者が順番で決めてるんですけど……。あ、コメントがありますね。『今回のコンセプトは、自分の大好きなかぼちやのスープをもっと世に広めようという野望のため！！人民よ！歌いながらかぼちやのスープを食すべし！チャッチャッチャッチャッ、かぼちやのスープ』——以下略」

「……。あのさあ、このパスワードって外に出る奴しか知らないんだろ？しかもほとんど学者。どーやったら世に広まるんだよ？」
本当に好きな食べ物で決めていたとは。この学者の精神年齢は相当低いに違いない。

「チャッチャッチャッチャッ、かぼちやのスープ」

友美がニコニコと歌い出す。しかしお世辞にも上手いとは言えない。
「歌わんでええつつの！まったく、誰がつけたのよ、こんなふざけたパスワード……。一度でいいから顔を見てみたいよ」

真由美の言葉で到は更にページをスクロールさせる。そして手を止め、言いくそに口を開く。

「……真由美さん、これ決めたのあなたのお父さんみたいですよ」
真由美はよろけて倒れそうになった。

「……あいつかー！！確かに破天荒な性格してたけど、有り得ないつつのー！！」

喚く真由美の横で、到はバリアの壁に指で長方形を書く。するとそ

ここにパスワード入力画面が現れた。

「まあまあ、いいじゃないですか簡単で。中にはもつと難しいのを
つける人もいますからね」

「例えばおまえとか？」

綾子は冗談半分で聞いてみた。

「それでもありませんよ。僕が以前やったのは「A P # ^ j k d
@、*：l<・s z」。かぼちゃのスープよりは難しいですけど、
覚えられなくはないですから」

到は操作をしながら大真面目に言った。

「覚えられるかー！！」

「おまえ何考えてんだよ！！」

「よくそんなの覚えてるわね」

みんなが口々に言う。勿論綾子も絶対覚えられないと思う。

「そうですか…。そういうものなんですか…」

到はカルチャーショックを受けたようだ。

「はあ。こんな時に望月君がいたら少しは話せるのに」

そうばやくと、さつさとパスワードを打ってバリアを解除した。彼の
言う望月とは一体誰なのだろう？

「さ、これで中に入れますよ」

そうだ。そんなことより自分のことだ。「次に帰ったら父と会う」
と決めたのだから。

街の中に入ると、すぐにバリアが復活した。どうやら数秒で元に戻る
ようになっていたらしい。

「とりあえず今日は泊まるだけにしない？シヴァとライラの連戦で
疲れたし、もう夕方になるもん」

ここは情報都市だ。父にも会えるしちょうどいい。

「ああ、そうだ…」

「こらー！！止まりなさい、その詐欺師ーっ！！」

耳をつんざく叫び声で、綾子は言葉を呑み込んだ。何か聞き覚えの
ある声だ。綾子は前方を注意してみた。そしてそのあまりにもおか

しな光景に、我が目を疑った。

鏡で映したように自分そっくりな少女と、それを追いかける婦警の格好をした少女がいる。

「な…なんだあ!？」

呆気にとられていると、二人が同時にこちらに気づき、

「綾子！」

「綾様！」

と叫んだのだった。

第四章 謎の行方 ― みゆり編 ―

嘘みたい。嘘みたい。今私の目の前に、本物の綾様がいるなんて！
「お久しぶりです、綾様！」

――綾子と同じ髪型の、くりくりした瞳の愛らしい少女、みゆり――
「は、いきなり綾子に抱きついた。」

「おまえ…、みゆり！？」

覚えていてくれた。ただそれだけで、みゆりは感激のあまり泣きそうになった。ずっと、ずっと待っていたのだ。また彼女に会える日を。

「知り合い？」

自分よりいくつか年上に見える女が聞いた。二人の天使と子ども、青年までいる。綾様の仲間なのだろうか。そう思うと無性に腹が立つてきた。

「ああ…。この子は私の」

「彼女です」

腹いせに、綾子に対して悪ふざけを試してみた。

「なんですとー！？」

途端に彼らにどよめきが走る。

「ま…まさか黒崎さん、そっちの人だったんですか！？」

「そーいや、前も女口説いてたよな」

「しかもその子の服装…。婦警って」

「？なんの話してるのー！？」

「おまえは知らなくていい！！つかてめーら、変な妄想すんな！
いいか、この子はただの幼なじみだ！みゆりも変な冗談言ってる
でなんとか言え！」

「……私を差し置いて、他の女の方を口説くなんてどーいうこと
ですのっ！？」

「……へ？」

イライラする。イライラする。さつきから何だと言っの？この人達も、口説かれてきた女達も。

「黒崎さん…結婚詐欺とかもやってたんですか？」

青年が遠い目で言った。

「誰がだ、誰がっ！！」

イライラする。そうやって仲良そうにしているとところを見ると。私一人が置いてかれてるみたいで。

「どう…して。どうしてあの時連れて行ってくれなかったのですか…！？二年前、綾様が旅立たれる時…」

「それは…」

「あの時…私にはまだ力がなかったから…、だから断られたのだと思って、今まで必死に剣術を学んで…！」

母が早くに亡くなり、父は仕事が忙しくてあまり一緒にいられなかった。それでも綾様やおじさま達が可愛がってくれたから、寂しさを感じることはあまりなかった。けれどおじさま夫婦が別居し、綾子も旅に出ることになって初めて寂しさを感じた。本当の家族のようには思っていたのに。置いていかれる気がした。自分一人が取り残されていくような。

『大丈夫。また近いうちに戻ってくるから。私が強くなってみゆりを守るようになったら、その時は…』

その言葉だけを信じて待っていたのに。いつか必ず、私の剣技で綾様をお助けすると、固く誓っていたのに。

「それなのに…、どうしてこんな子どもが仲間にいるのです！？私よりその子の方が強いとでも！？」

「？とものことー？」

どうして綾様は、私を一番最初に仲間にしてくれなかったのだろう。どうして二年も待たせたのだろう。

「綾様は…私が待っている間、他の女の方とイチャついて…。私のことなんか…」

「いや、それはかなり語弊が…」

綾子はしどろもどろに答える。

「こうなったら仕方ありませんわね…。その方達に、綾様を賭けて決闘を申し込みます！」

「ば、バカ言うな！！」

「……なんか、旦那の浮気相手に決闘を申し込む妻ってカンジですね」

「修羅場だな」

「こういう時に日頃の行いがものを言うんだよね」

「てめーら、ちったあフォローしろ！！」

「黒崎さん、そんなに目くじらたてなくても。本気で決闘するわけじゃないんだし…」

「いーや、アイツは本気だ！やると言ったらやるやつなんだ！」

「そうですね！女に二言はございません！幸いうちはマスコミ関係の仕事をしておりますので、ありとあらゆる手段を駆使して関係者を洗い出します！」

「だんだん犯人探しになってきたね」

「婦警のコスプレは伊達じゃないのか」

「関係ないから！」

「みゆりさん…。いいライバルになりそうですね…」

「なんのだよ！？」

もはや誰が何を言っているのか解らない。

「とにかくやめろみゆり！」

「何故ですの！？そんなに私よりその方達が大事ですの！？」

「違うって！」

「……あのさ、要するに綾子が責任取ればいい話なんじゃないの？」

「責任…って結婚ですか？」

「ふざけんな」

「じゃなくって、一緒に来たいならくればって話。今までいられなかった分、取り戻せばいいのよ」

「それは名案ですわ！決闘に時間を費やすより有意義に過ごせます

わね」

「ね、いいよね、綾子？」

「……も、もちろん」

みゆりの顔がぱあつと輝く。綾様が乗り気じゃなさそうなのはきつと気のせいだろう。

「私、宝城みゆりと申します。改めてよろしくお願いします」

腰に下げていた剣の蒼い宝玉が、再会を喜ぶかのようにキラリと光った。

第四章 謎の行方 ―ルシフェル編―

「ところでみゆり、こんなところで何してたんだ？」

綾子がみゆりに尋ねる。婦警のコスプレで綾子のそっくりさんを追いかけていた、という時点で既におかしすぎるのだが、それをあえて訊く綾子もある意味強者かもしれない。

みゆりはじろりと綾子似の少女を見た。

「この方、綾様の名を語り市民から金品を騙しとっていたのですわ！ 他の方は騙せてもこの私は騙せませんわよ！」

「……自分で見ても同じ顔に見えるんだけど、どこが違うんだ？」

綾子はさっぱり解らないと唸った。

「何って、オーラが違いますわよ」

どこの霊能力者だおまえは、とルシフェルは心の中で突っ込みを入れた。

「オーラねえ……。それは真似出来ないな、さすがに」

少女は赤髪の少年の姿になった。

「ああつ、おまえチエイニー！？」

「なんでこんなところにいるの！？」

彼とは転移させてくれた時に別れたはずだが。

「……な、なんなんですかあなたは！？ い、いきなり変身なんかして……！」

一番驚いたのは他ならぬみゆりだった。まあ、目の前で変化の術を見せられればいやでも驚くだろうが。それはさておきみゆりの暴走癖は彼女を“驚いた”だけにはしてくれなかった。

「……解りましたわ。あなたはあの変装が十八番の大泥棒、アルセーヌルパンの孫なのですね！？ そして綾様とは永遠のライバル！！なんて素敵な関係でしょう！ けれどいくら綾様に勝てないからって逆恨みはいけませんわ。綾様に化けて市民の小遣い金をちまちま巻き上げるなんて、あまりにも惨めだと思いませんか？ お祖父様もきつと

嘆いておられますわ。大泥棒としてのプライドと名にかけて、正々堂々もつと大金を盗まなければ！」

「……」

この女のぶつ飛んだ思考回路はどうしたものだろう…。

「…とりあえず犯罪勧めるなよ」

「殺人教唆で捕まるんでは」

リーナは難しい言葉を知っているが意味をまるでわかってない。

「殺人は違うだろ！つーか捕まるからとか以前に道徳的にだめだろーが！」

「何よ、ちよつと言つてみたかっただけじゃない！天野君も、なんでそんな笑つてんのよ！」

到はツボに入ったらしく、腹を抱えてヒイヒイ言っている。

「…ルパンの孫でも何でもいいけどさ。本題入らせるよ」

チエイニーは説明するのも面倒だと思っただけらしい。実際自分もそう思った。どうやらみゆりもかなり強烈な人間らしい。今更（誰とは言わないが）変人が一人増えたところでどうってことない気もするが。むしろどうにでもなれというカンジだ。変人の扱いに慣れていく自分に多少凹むことは確実だが。

チエイニーは持っている大きめの鞆からブーツを取り出した。黒の布地に銀の金具がついている。「これを届けに来たんだよ。雪天使達に、ちゃんと洞窟に行ってきたって伝えたら、お礼につてさ。」

綾子にだと思っけど」

綾子は礼を言つて受け取ると早速履き替えた。

「あとこれとこれ」

チエイニーは真由美にナツクルを、到に濃紫色の小さな石を手渡した。

「ナツクルはオレが魔法で造ったんだ。結構うまくいったから使えると思うよ。到に渡したのは光玉から作り出した魔石。何かの役に立つかもしれないから持つとけ」

魔石…か。到が聖戦士なら使い道はあるかもしれない。

「おつ、ブーツなのになんか軽い」

履き終えた綾子は嬉しそうだ。

「風の魔法がかかっているからな。早く渡そうと思ったのにおまえらがなかなか捕まなくてさ。もうとつくに中にいるかと思ったのに、こんな入り口で何やってたんだよ？」

「あのねっ、カボチャのスープ食べるんだよっ。歌も歌うのっ！」
「……は？」

今の友美の説明で、理解しろという方が無理な話だ。

「シンデレラの場合カボチャっ、カボチャっ」

「歌わんでええっつの！」

いきなり歌い出した友美にすかさず真由美がツツコミを入れる。

「いろいろあつて、遅れてしまったんですよ。でもどうして黒崎さんの姿に？」

「いやあ、赤髪つて目立つからさ。これなら到あたりオレが変化してるって気付いてくれるかなつて。けど逆に目立ちすぎたみたいでさ。そこの、変な恰好の女…みゆりだっけ？に追いかけられるし、もう最悪」

チエイニーのやれやれという顔に、みゆりも黙ってはいなかった。

「私の趣味にケチ付ける気ですの！？」

「趣味なのか！？」

「危ない趣味ですね」

「人のこと言えるの天野君」

「そうですねっ、貴方みたいなインチキ学者を絵に描いたような人に言われたくありませんわよ！どうせその眼鏡も伊達なのでしよう！？」

「……なんでわかったんだらう。やっぱり霊能力者なのか？いや、チエイニーをルパン三世と間違えたくらいだし…たまたま…か？」

「みゆりさん…やはり貴方とはいいライバルになれそうです…」

到が不敵な笑みで返す。みゆりの個性に特に動じる様子もなく、状況を楽しんでるかのようだ。そういうところが食えないのだが、他

人を犠牲にしてまで何かをしようとする人間じゃない分安心はしてる。現にライラ戦の時、一人で逃げることも出来たのに、一か八かに賭けてくれた。

だが兄は違った。誰も殺してないとか、そういう問題じゃない。あには仲間の炎天使を襲わせた。“世界のため”に他人を犠牲にした。それが許せない。他にも方法はあったはずだ。オレが導士になることにしたって、兄が生きているのならオレが必要はなかったんじゃないのか？——一体何考えてやがる。

「残念ながら、私の当面のライバルはルパン三世ですわ。詐欺まがいのことをして綾様の名を汚すなんてファンとして許せません！即刻警察に突き出してくれますわ！」

みゆりは到を相手にせず、くるとチエイニーの方を向いてビシツと言っていた。ギャーギャーうるさいみゆりのおかげで、おちおち感傷にも浸れない。

「そんなの、綾子いつもやってるよねえ？」

リーナが水を差した。

「そうそう、大体あいつらから寄って来たんぜ？変に断って綾子の評判落とすわけにいかねーし。ちゃんとファンサービスしてきたし、いいだろ？」

チエイニーも調子に乗って自分の都合のいいように言い訳する。

「ファンサービス？」

「体で払ってきたんだよん」

「てめ、人の体で何やったー！？」

今まであまり気にしていなかった綾子も、本気で焦る。

「あつはは。ジョークジョーク。じゃ、用も済んだしもう帰るよ。バイ」

無邪気に笑うと、彼は光と共に消えて去った。

「閃光弾で逃げましたわね！？さすがルパン三世！相手に不足はありませんわ！今度遭ったが百年目、絶対に逃がしませんことよっ！」

神を相手にするにはかなり無謀な気もするが。

「認めない…。あれが神だなんて、私は絶対認めないぞ！」

憤慨する綾子。気持ちはよくわかる。現実全てが何かの間違いであつてほしい。

「そうですね、良かったら皆さん、今日は私の家にお泊まりください。今までのこととかもお聞きしたいですし…」

「そうだな。じゃあ頼むよ」

一行はみゆりの家に向かって歩き出した。

第五章 五大都市 ―綾子編―

妙なことになった。どうしてこんな事になったんだか。…いや、元
はと言えば自分の言動のせいなのだ。

あの時みゆりに言った言葉はその場しのぎのもので、本気で迎えに
行くつもりはなかったし、彼女が覚えているとも思わなかった。勿
論彼女のことは心配していたし、連れて行かなかったのもその身を
案じてだった。それに何より彼女にはたった一人の家族である父が
いる。父と確執のある自分とはかく、彼女を家族から遠ざけるの
は躊躇われたのだ。だから彼女と行くことは出来なかった。なのに、
本当に一緒に行つていいのだろうか。

「なあみゆり…私のために旅に出ようつて思つてるなら、考え直し
てくれないか？おじさんを一人置いてはいけないだろ？」

「あら、お父様にはきちんとお話ししてありますわ。それに…私が
旅に出たい理由は綾様のためだけじゃありませんわよ」

「……？それって…」

「この剣ですわ」

みゆりは腰に下げていた大剣を鞘から抜いて見せた。中央の青い宝
玉が光る。

「代々うちに伝わる聖剣ファールウェルという剣ですの。ただ、それ
以上のことは何もわからないので…。この剣がどこから来たのか知
りたいのです」

「どこから来たのか…？」

「ええ…。この剣…、なんだか懐かしくて暖かくて…。だから、気
になつちゃうんですよね…」

みゆりは大事そうに剣を鞘に収めた。

「けどそんなの、別に外に出なくても調べられるんじゃないか…」

「それなんですけど…。先日知り合つた旅の剣士の方に見ていただ
いたら、消された歴史の時代のものじゃないかと言つていたんです。

その時代にも魔物がいて、伝説の剣戦った方がいたんですって」
リーナが目を見開いた。

「なんで旅の剣士がそこまで知ってるのよ？ローグは運命に選ばれし者しか知り得ないのに……」

「あ、何でもお父様が考古学者で、そういうことを調べていたそうですわ。彼自身もその時代の首飾りを持っていましたし」

「……ちよつと待て。考古学者の父、首飾りを持つ旅の剣士……?!」

「名前は!？」

真由美がみゆりの肩を掴んで訊く。

「博ですわ。森上博さん」

「お兄ちゃん……」

真由美は手を放し呟いた。無事がわかってほつとしたのだろう。しかしまさかみゆりが彼を知っていたとは。

「まあ！それではあなたが博さんの妹さん?!似ていらつしやらないので判りませんでしたわ」

「兄とはどこで？」

「ひと月くらい前に学術都市で……。行き先が知りたいたのでしたら、望月さんの方が詳しいかもしれませんわ」

望月……?そういえばさつき到がそんな名前を……

「望月君とお知り合いでか？」

「あら、あなたも？」

「学生時代からの腐れ縁なんですよ。もつとも彼は科学者ではなく、大学の理工学部を出た後、心理学部へ入り直して精神科医やってますけど」

なるほど。道理で到が“話せる”わけだ。

「二回も大学行つたの!？」

「到よりすげえんじやねえか？」

「そりやそうですよ。『やっぱり精神科医になりたい』って言って、ホントになっちゃうんですから。しかも大学は飛び級して二回とも二年で卒業してるし」

「おまえだつて飛び級して科学者やってんじゃん」

「僕はなりたいたからなつたんじゃなくて、なれそうだからなつたんですよ」

到には悪気はなかった。しかし勉強で苦勞している真由美には嫌味にしか聞こえない。

「うわ、すつごいム力つく」

「まあ、なつてしまえば後は二年に一度研究成果を出してればいいだけですから。それで、みゆりさんはどうして彼と？」

到はあつさり言つてのけると話をみゆりに戻した。

「綾様のお母様が武術都市で拳法を教えていて…。私、よく遊びに行つてたんですけど、望月さんはその生徒で。それで私も顔見知りになつて…」

「そういえば、彼は格闘術も得意でしたね」

「ふーん。天野君みたいにガリ勉じゃないんだ」

「なつ…！」

リーナの失礼極まりない言動に到がキレかかるが、それについては反論できないらしい。事実、訊けば訊くほど非の打ち所がない。

「なんか弱点ないのかな？」

リーナは“何でも出来る人間”が苦手なので、無理矢理弱みを握ろうとしている。相手にとっては迷惑以外の何者でもない。彼のこの先を考えると哀れだ。

「弱点というか…、寝起きが最悪だつたり、鈍感で女心が解らなかつたりはありましたね」

「寝起き最悪つて…」

「しかも心理学専攻で女心が解らないつて、どうなんだ」

「うーん、まあ、个性的でしたからね、彼は」

当然、おまえが言つな、と真由美のツツコミが炸裂する。

「で、博とそいつの関係は？」

「ひよんな事から私達と、望月さんのお知り合いの博さんと獣医師の久保さんと、望月さんの大学時代の助教授二人とグラッド遺跡に

探索に行くことになりました…」

「ええっ、探索！？お兄ちゃんと！？」

「望月君、先生達と調査なんて羨ましすぎる！！」

真由美と、到が何かずれた視点で食いついた。

「皆さんとってもお強くて、勉強になりましたわ。望月さんのロツドの扱いも、もう最高で…」

「ロツド？」

普通、魔物と戦うなら剣・弓・体術・銃が一般的だ。ロツドなんて聞いたことがない。

「望月さんの家に代々伝わるもので、博さんが言うには、やっぱり千年前に戦った方の持ち主だったそうです」

「けどロツドって殺傷能力なくねえ？」

「その持ち主は神に仕える司祭様で、本来は両端についた聖玉の力で回復呪文を唱えるためのものだったと聞いていますわ」

神に仕える司祭——そして聖玉のついたロツド。もしかして、ルシフェルの言っていた悪魔と戦った七人の人間なのだろうか？

「聖玉って、どんなものですか？」

「一方は大きい宝玉で、中に太陽の絵が浮かび上がっています。もう一方は小さな宝玉に三日月の絵が」

「じゃあ、僕の方から連絡入れておきますよ。そして、なんで教えてくれなかったのか吐かせます！」

到は親友？がそれほど興味深いロツドの存在を隠していたことが、相当腹立たしいらしい。

『吐かせる』と言った顔がマジだった。

「別にいいじゃん。親友だからって何でも言わなきゃいけないわけじゃないんだし」

「真由美さん、僕は別に彼のプライベートはどうでもいいんです。実は二股かけてるとか、ホストクラブで働いてるとか、そんなことがあったとして僕には全く関係ありません。けどロツドのことは違います！僕と彼はライバルなんです！彼だけが知っていて僕は知ら

ないなんて、そんなことがあっていいと思います!？」

到は物凄く理不尽な理由で喚き散らした。ここまできると学者気質も重症だ。

「望月さんが二股なんてするわけないじゃないですかの!今度そんなことを言ったら、望月さんの代わりに私があなを成敗してくれますわ!」

慕っている人物を侮辱されて、みゆりがプンス力怒り出す。それでも気を取り直してある建物を指した。「皆さん、あれが私の家ですわ」

第五章 五大都市 ― 到編 ―

図書館や市役所の建ち並ぶ街の一等地に、学校と見違えるほど大きくて立派な建物があった。みゆりはそこを指していた。

「…なんの冗談だよ」

みゆりの家はもつと街から離れた住宅街にあったらう？と綾子が言った。

「冗談なんかじゃありませんわ。事業が成功したので新築しましたの」

到は彼女がマスコミ関係の仕事だと言っていたことを思い出した。

「一階が出版社、二階が事務所、三階が自宅ですわ」

自宅を別にしなかったのは、この辺の売地がここしなくて、自宅だけ住宅街だと往来に不便だからと答えた。また、泊まり込みで仕事をする社員も珍しくないで、彼らのために三階の半分をホテル風の造りにし、無料で利用出来るようしているとも。自宅とは内部から仕切って分けているので、同じ階でも入り口が違い、通り抜けは出来ないらしい。今回は社員用の部屋を使ってくれとのことだったが、男の自分からすれば適切な対応だと思う。

「お部屋に案内する前に、お父様にお会いになつてください」

彼女の父ということは社長なのだろうが、この奇妙な建物の考案者だと思ふと会いたくないような気もしてくる。よくいえば斬新なのかもしれないが。

玄関に入ろうとしたところで数人の女性に呼び止められた。

「ねえ、ちよつと。あなた、偽綾様追っかけてた子でしょ？そこにいる偽物処分、どうなったの？」

「それが、偽物は取り逃がしてしまいました…。ですがこちらのご本人に会うことが出来ました」

「その人が本物？じゃあとりあえずサインもらえるかしら」

おそらく二十代後半の女性が、すかさずバッグから手帳を取り出す。

「ちょ、ちよつとまつ…、なんでサイン?!」

「? 有名人のサイン欲しがるのは普通でしょ?」

「有名人!?!」

綾子は目を剥いた。彼女が女性をナンパするのはいつものことだが、何故見知らぬ女性が綾子を知っているのか?

「雑誌によく出てるじゃない」

「あら、うちの雑誌をご愛読いただいて光栄ですわ」

“うちの雑誌”ということは。

「元凶はおまえか…」

綾子は声を震わせ言った。

みゆりの説明をまとめるところなる。

まず綾子が旅に出てすぐ、科学者の研究により、擬似エネルギーを使ったBFS機能制度が確立された。その時、制度の公布から施行まで時間があったにもかかわらず、綾子は一度も五大都市へ戻らなかったため、バリアの解除パスワードを知らぬまま外の人間扱いされてしまった。つまり綾子がいつか戻りたいと思っても、簡単には戻れなくなってしまったのだ。

そのことを心配したみゆりは、取材で外に出る記者に定期的に綾子の行方を追わせ、ここに戻る素振りを見せたらパスワードを教えるようにと頼んでおいたのだ。

だが綾子には全く戻る気配はなく、記者に撮らせていた綾子の追跡証拠写真が手元に溜まる一方だった。それも山のように。

余談になるが、綾子の強さと美しさを敬愛していたみゆりが、暇さえあればその写真を見つめ、顔を赤らめて溜息をつき、周りの人間から本気で同性愛の疑いをかけられたのは言うまでもない。

それはさておき。事の発端はその写真だった。みゆりはその写真を綾子の父にも見せていたのだが、ある時雑誌の企画で彼を——黒崎巧剣術師範取材する機会に恵まれた。彼の弟子でもあったみゆりはその時の取材にも同行していたのだが、その時彼はこう言ったのだ。

『私の写真を使うのなら、みゆりちゃんがよく見せてくれる、綾子の写真も一緒に載せてくれないかな？親子揃って美人で強いと絵になるしね。その分私の株も上がるというものだよ』

みゆりとしては、本人の承諾もなく、しかも盗み撮りした写真を勝手に掲載するのはどうかと思った。

思ったのだが。

彼の言い分がもっとも過ぎて反論出来なかった。というより反対する気が失せてしまったのである。

けれど絵になったその二人の写真が、どれだけ読者に影響をもたらすか考えていなかった。まさかHPアクセス数が一万件を超え、編集部への電話が鳴り止まない日が来るなどとは。

以後、読者からの要望で二人の写真を定期的に掲載し、あまつさえポスターやら写真集なども販売しているとのこと。

ここまで来ると肖像権どころの話じゃないな、と到は思った。

当の本人の綾子は頭を抱えて『あのくそ親父——っ！』と喚いている。

みゆりにも問題があるにせよ、事実とはいえ自身を美しく強いと断言した挙げ句、株をあげるために娘を使った父もすごい。いや、あるいは他に理由があるのかもしれないが。到は二年前まで学術都市に住んでいたが、そこでも情報都市の彼の高名さが聞こえてくるほどだった。だからこそ不思議に思う。どこにそれ以上名を売る必要があるのだろうか。

綾子はわらわらと集まりだした十数名の女性にせがまれ、サインを

書いていた。彼女の性格からすると、断ることも出来ずにかなりやけくそでだろうが。そんな綾子を見ながら到は頭をひねった。

何故彼女は旅に出たのだろう。今まで剣術修行のためかと思っていたが、あの高名な父の元を離れてまで外に出る必要があったとは思えない。

綾子がサインを書き終えて、ようやくみゆりの自宅？に入る。

到は好奇心から綾子に旅に出た理由を尋ねたが、返ってきた『父を超えるため』という返事に呆れ果てた。

「そんなに強いのお父さん」

真由美が問う。東国出の彼女は知らないのだろう。

「そりゃあね。剣術の神様と呼ばれる人ですから。黒崎流剣術を確立し、武術都市で開かれる武術大会では毎年必ず優勝。その美貌と相まって多くの女性を魅了していて、彼目当てで道場に通う女性も少なくないとか」

「有段者のお弟子さんが十人がかりでかすり傷一つつけられませんでしたし」

「僕も観てました。あの剣裁きはなかなかみれませんよ」

だからこそ、彼の剣術を吸収してからでないと『超える』のは難しいと思うのだが。

「……黒崎さんのお父さんって、大物だったんだね」

真由美が自分の父を棚に上げて感心していた。というか多分彼女は自分の父を大物と考えていないのだろう。

入って右の突き当たりにあるエレベーターで二階に上がる。二つ先の部屋——社長室でみゆりが足を止めノックをした。『入りなさい』との返事を受け、みゆりを先頭に全員が入室する。

先客が二人、社長らしき男性とテーブルを挟み向かい合ってソファに座っている。先客の方は自分たちに背を向けていたので顔はわからなかったが、談笑しているところを見ると仕事相手というわけはなさそうだ。

社長とおぼしき男性が立ち上がり、みゆりに『お客様かい？』と尋ねた。そしてこちらを見て目をしばしばさせた。初めは外に出ていた妖精二人に驚いたのかと思ったが、彼の目は明らかに綾子に向けられていた。

並んで座っていた二人の先客は、

「じゃあ、僕たちはそろそろお暇するよ。結構長居しちゃったし」

「今度は是非みゆりちゃんとうちに来てくださいね」

といって部屋を出ようとこちらを振り返った。そしてやっぱり綾子を見て目をしばしばさせた。

綾子はというと、まるで見てはいけないものを見てしまったとばかりに、思い切り目を逸らす。

「あら、巧さんに優さん。来てらしたんですね。ちょうど良かったですわ」

そこにいたのは黒崎巧——綾子の父親と、黒崎優——綾子の母親だった。

巧は二年前に見た時と同じ美貌を誇っていた。黒髪を長めに伸ばし、穏やかそうな黒い瞳を向けて微笑む姿は、綾子とよく似ていた。

整った目鼻立ちで端正な顔をしている。それだけだと一見優男風に見えるのだが、意外に広い肩幅とゴツゴツした手がことなく強さを感じさせる。上着の上からではよくわからないが、鍛え抜かれて引き締まった身体をしているのだろう。巧に人気があるのも頷ける。

隣にいる優は少し垂れ目だ。綾子の目は母親譲らしい。長い茶髪を太い三つ編みにしている。二人とも三十代だろうがともすれば二十代にも見える若々しさだ。

「……なんっでおまえがここにいる！！」

綾子がげっ、と顔をしかめた。

「なんでって、僕とみゆりちゃんのおじさんが幼なじみだって知ってるだろう？ちょっと遊びに来たんだよ。まさか二年離れてる間にそんなことまで忘れちゃったのかい？頼むから父さんより先にボケ

ないでくれよ」

「そうじゃねえ！こつちにだって心の準備つてもんがあんだよ！」

「僕だってそうだよ。綾ちゃんに会ったら一番最初にハグしてあげ
るって決めてたのに、タイミング逃しちゃったじゃないか」

「要らねーよ！」

「また照れちゃって。いいよ、いいよ。今からでも遅くないから
僕の胸に飛び込んでおいで」

巧は綾子の前に両手をいっばいに広げた。

「殺すぞデメエ」

「おーこわ…。聞いた？優。綾ちゃんがイジメるよ」

「綾ちゃん、お父さんをイジメちゃダメでしょ？お父さんはね、本
気で心配してたのよ。綾ちゃんがボケてお父さんのことを忘れちゃ
ったんじゃないかって」

心配することがかなり間違っている。しかも大真面目に言ってる辺
りどうかと思う。

「だから、なんでそーなるんだよ」

「だって、一度も家に戻ってくれなかった…」

しょんぼりする巧はただの親バカだ。二年前、『私の剣は誰にも負
けない』と言つてのけた姿は微塵も感じられない。

「可愛い子には旅をさせよっていうから何も言わなかったけど、本
当は辛かったんだぞ。だからせめて紙の上だけでも一緒にと思つて
みゆりちゃんに写真を…」

なるほど、娘の写真を一緒に掲載させたのはそんな理由があつたの
か。

「え…？だから引き留めなかったのか？じゃあなんで母さんの時は
…」

「引き留めるも何も…。それが優の長年の夢だったんだ。今まで優
が僕の剣の道を支えてくれたように、今度は僕が応援してあげたい
って思うのは当然のことだろう？」

「巧…」

夫婦は熱い視線で見つめあった。

「あの……。もしもーし……」

真由美の呼びかけでハッとした優が慌ててまくしたてる。

「そ、そうなのよ！武闘の教室を開くのが学生の頃からの夢だったの！本当はもつと綾ちゃんが大きくなるまで待ちたかったんだけど、武術は体力がついていかなかったら終わりだし……」

「聞いてねーよ、そんな話！」

「あれ？そうだったか？」

「そうだよ！っーか、だったらなんで母さんちに連れてってくれなかったんだよ！？」

「？綾ちゃん連れてってってくれて言っただけ？」「……言っただけ……」

「優ってばさ、同じ武術都市だと商売敵になるから嫌だって、武術都市に住んじやうんだもん。今みたいにトランスポートが使えない頃だったから、魔物のうじやうじやいる外を通らなきゃいけなかったんだよ！？」

「子連れで戦うのは危険ですもんね」

「違うよ！綾ちゃんのことを守りきれ自信はあったけど……、十にも満たない綾ちゃんに、魔物の首を切り裂くシーンを見せたくないだろお！」

「そ……、そんな理由……、何も言わなかった……。私がどんだけ……」泣き顔で精一杯言葉を紡ぐ綾子。

「綾ちゃん……。寂しかったのね。ごめんね……」

「今からでも遅くないから、さあ、僕の胸に……」

巧はまたも両手をいっばいに広げる。

「嫌だよ！みんな見てんだろ！っーかお前の頭はソレしかねーのか！」

「わかった。じゃあ後でこっそり……」

「誰がするか！」

（寂しい、か……）

到は、一人家に残った妹を思う。旅に出てそんなに時が経ったわけではないが、それでもただ一つの心残りだ。

それにしても。妹とは三年しか一緒に住んでいない。それでもこうして愛情を注げるとは。肉親の情とは奥が深い。綾子も多少誤解があったようだが、両親に愛されていて心から良かったと思う。

「ですが何故社長室に？いつもなら自宅の部屋にいらっしやいますのに」

みゆりの問いに巧が嬉しげに話す。

「ほら、例の企画の件」

「まあ、そうでしたの」

「なになに、何の話？」

思わずリーナが身を乗り出す。

「綾様を歌手デビューさせようという話が出ておりまして。巧さんにも監修を……」

「何勝手に話進めてんだよ！？」

「まあまあ。もう曲も出来てるんだよ。一般公募したんだけど、これが結構集まったんだ」

みゆりの父もあっけらかんと言った。

「公募ってことは全国公認ですか」

「そうそう。この件に関しては向こうの芸プロと提携してるんだ」

「何てことしてくれたんだ！！」

さすが社長。抜け目がない。「契約金はいくらがいい？百万ゴールドが妥当だと思うんだが」

「百万ゴールドあ！？嘘だろ！？」

これには到も仰天した。百万ゴールドといえば、小さな家なら一軒建つ額だ。

「黒崎さん、これはやるべきですよ！百万ゴールドあったら最新式ECP装置が買え……」

「誰がデメエにやるか！」

「金のことは別にしても、やってもいいんじゃないか？どうせしばらくここにいるんだし」

「望月君に会ったっけ」

「…わかったよ。もう公認してるならしょうがねーしな」

綾子が承諾すると、社長がニコニコして彼女を見た。

「それじゃあ、早速明日から歌撮りだ。今日はゆっくりして明日に備えなさい」

「私達も帰らないと。あ、そうだ。綾ちゃんにこれあげる」

優は首から下げていた十字架のネックレスを外し、綾子に渡した。

「これは？」「うちに代々伝わるものなの。お守り代わりに持っていつて」

「ありがとう」

綾子が首に付けたとき、中央の緑の宝玉が一瞬光を放ったのを到は見逃さなかった。

（なんだ？宝石そのものの光とは違う…。あの輝きは…？）

「じゃあまたね、綾ちゃん」

巧は去り際に綾子のおでこにキスをした。

「またねーみんな」

とつとと退出する二人。綾子はしばし茫然としていたが、我に返り叫ぶのだった。

「あんのくそ親父ー！！」

どうやら綾子の口説き癖は父親譲りらしい、と到は思った。

第五章 五大都市 ―リーナ編―

翌日の午前十一時。リーナはみゆり、ルシフェル、友美と共に、綾子の歌撮りを見学していた。

到が昨夜望月という男に電話したらしいのだが、今日の午後からなら空いているとのことだったので、それまでの暇潰しである。もっとも、優の開いている道場を覗きに行つて稽古をつけてもらっている真由美や、朝一で国立図書館に行った到には無縁の言葉だろうが、リーナはレコーディング中の綾子の歌を、部屋の外（ガラス越し）に聴いていた。彼女の歌を聴くのはこれが初めてだ。

♪天使にだってなれるって、信じてたあの頃は、世界に何の疑いもなく。だけどそれはただの希望でしかないと気付いた時、僕はどこにも存在しなくなつた。世界は色をなくして、何も見えなくて何も聞こえなくて。暗闇の底に落ちながら僕は歌う。僕はここにいるよ。僕はここにいます。

綾子の歌声はよくとおり、とても美しく響いた。悲しくて切なくなるのは歌詞のせいでもあるのだろうか。“天使”という言葉が自分のことを歌っているようで、なんだか無性に泣きたくなつた。

綾子を見ながら思うこと。それはあのクロスペンダントのことだった。怖れていたことが起きてしまった。こんな時、ラファエル様の人格が戻つていれば少しは頼れるのに。肝心の友美はまたカボチャのスープを歌っている。しかも相変わらず腹にドシンと来る歌声で、声量だけはやたらあるので余計に質が悪い。

「お、到」

「ルシフェル、いい子にしてみましたか？」

「ガキ扱いすんじゃないよ」

図書館にいるはずの到が来た。

「あら、随分早かったんですね」

「さつとデータベースのチェックをして、本を借りてきただけです

から」

「珍しいな。いつも図書館で読むのに」

「そういえば、以前の町では借りてはいなかった。」

「ここの図書館は広すぎて落ち着かないんですよ。五大都市内なら
トランスポートですぐに返しに行けますし」

「の説明によると、トランスポート（転送装置）もいつからかある
科学装置で、例えば情報都市にいても、それを使えば瞬時に別の都
市に移動できるというものらしい。」

「…それに、望月君に会う前に、最低限のことは知っておきたいん
です。話してくれませんか？」

「到が探るような目を向けた。これ以上隠し通すことは不可能だし無
意味だろう。リーナは覚悟を決めた。」

「…わかった。で、何が聞きたいの？」

「みゆりさんの剣と望月君が持っているというロッド…、それに黒
崎さんが昨日優さんから受け取った十字のペンダント…。あれはク
ロウと戦った七人の人間の物で、彼らがクロウと戦う運命だと暗に
示している。そうですね？」

「リーナは言葉に詰まった。まさか十字架の存在にまで気付くとは。
他の物とは違い、特に珍しい物でもないのに。もしかして、綾子が
それを付けた時に、一瞬宝玉が光ったのを見ていたのかもしれない。
自分と同じように。」

「見たくなかった。綾子がクロスペンダントの真の持ち主だという証
明なんか。だってあれは聖戦士の印なんかじゃない。」

「リーナは逆に到に問うた。」

「ねえ、天野君。真由美の兄の博がフューカを持っていったって話
だったけど、本当にそれを受け継ぐのが彼だと思ってる？」

「……？違うんですか？」

「少なくとも私は最初からそう思ってたわ。仮に博がフューカの持
ち主だとしたら、シエルがとくに覚醒して、彼を連れてクロウを
倒しに行ってるはずよ。それを三年もフラフラしてるなんておかし

いわ。多分博は七人の人間の——私達は聖戦士って呼んでるけど、その一人なのよ。これだけローグに関わってるってことは間違いないわ。人間は“知るべき者”しかローグに触れることは出来ないんだもの」

「…そうになると、フューカの持ち主はローグを知り、かつフューカと関係の深い真由美さんということに…」
到は自分と同じ考えを口にした。

「そこで重要なのがフューカを持つ者と聖戦士の位置付けよ。私達が受け継いできたローグの中で、聖戦士は世界が闇に覆われし時、再び生まれ変わるとされているわ。だから友美ほどはつきりしたものじゃなくても、既視感みたいな…前世の記憶が残ってる。みゆりが剣に感じているのがそれね」

「それじゃあ、僕が友美さんに感じたのも…」

「おそろくね」

リーナは続けた。

「だけどフューカを持つ者は違う。ただシエルと波長が合うってだけで、前世でクロウと戦ったってわけじゃないからローグとの縁も薄い。旅に出た理由も、博は魔物出現の調査のため、天野君はローグに、みゆりは剣に興味をもったため。対して真由美は兄を捜すため、綾子は剣を極めるため」

「…つまり、二人は聖戦士じゃないと？だとしたらあの十字架は？」
予想はしていた。真由美がフューカの話をした時から。

「フューカは光天使の宝具だった。でも宝具を与えられたのは光天使だけじゃない。風、炎、水、雷、地、闇天使の全ての種族に、よけれどクロウを封じる頃に闇天使の宝具、クロスペンダントが紛失したのよ」

「それってまさか…黒崎さんの十字架…！？」
到の顔が青ざめる。ルシフェルとみゆりはまだ事態を把握していないらしく、怪訝そうな顔をした。

「綾子が十字架の持ち主だったら何か困んのか？」

「十字架の持ち主って事はヴァイスさんと波長の合う人間ということ…。すなわちヴァイスさんと同じような体質。クロウが今度は黒崎さんの体に乗っ取る確率は充分にあります。味方の体なら、僕らも本気で攻撃出来ないでしょうから」

「な…、またあの時と同じ事を繰り返すつもりかよ!？」

努めて冷静に答える到だが、口元が微かに震えている。ルシフェルとみゆりも驚愕の事実には呆然とした。自分だって信じたくない。信じたくなかったから、ローグを解放する時何も言えなかった。ローグを解放する事は、綾子がローグに関わっていることを肯定し、クロウの盾にされる運命だと認めていくような気がしたから。

このままクロウと対決することになったとして、魂のない“体”だけのヴァイスと戦うならともかく、ずっと一緒に旅をしてきた綾子と戦えるほど自分は冷酷にはなれない。

しかし、現実には綾子がクロスペンダントの継承者である以上、そうならない方法を探し出さなければならぬ。当てがあるわけではないが、前世で白魔導士だった望月ならなんとか出来るかもしれない。大丈夫、まだ望みはある。

自分にそう言い聞かせて、不安を打ち払う。そしてふと気になっていたことを思い出した。

「ところでみゆり。聞きたいことがあるんだけど、なんでこの人達はあたし達妖精に驚かないの？」

最初はみゆりだけが博から聞いて知っているのかと思った。だが彼女の父も綾子の両親も全く動じていなかった。スタジオを見学している今でさえ、鞆に隠れていたところをみゆりに強引に引っ張り出されたのだが、スタッフは気にも止めていない。

「あら、ご存知ありませんでしたのね。3ヶ月前から五大都市では人と妖精が共存していますのよ」

みゆりの思いがけない言葉にリーナは眉をひそめた。

「そうなんですか!？僕もこの情報は逐一チェックしていますが、それは知りませんでした」

「当たり前ですわ。妖精狩りなどの犯罪を防止するために、情報操作をしているのですから。五大都市内ならば、法律を作って規制したり犯罪者を裁いたり出来ますが、外の人のことまで監視できませんもの」

国家機密を知れる学者の到が知らないとなると、自分たち天使は相当重要扱いされているらしい。もともと、学者だからこそ知られないように注意を払っているとも言えるが。何しろ買い手の多くは学者なのだ。

しかしそこまでして人間と共存する必要があるのかとも思う。仲間と旅をして人間を前より好きにはなったが、共に生活するとなるとまた別だ。自分達は生まれながらに魔力を持ち、それによって自然界のエネルギーを支えている。故に自然と生きることが当たり前だ。

第一、子どもが十歳になれば天界へ行く決まりのある天使にとって、人間と過ごせる期間はたかがしれている。そんな中で人間である到と過ごすルシフェルは特殊だと言える。

「いい人間を見つけられれば悪くないんじゃないか？…ただきつかけがちよつと気になるけど」

ルシフェルが不思議そうに聞いた。

「実は3ヶ月前にこの国の王女が、好奇心からBFSを解除し、外へ出てしまったのです。そして迎撃用兵器の射程外に出たところで魔物に襲われて…。その時たまたま居合わせた二人の妖精さんが王女を助けたのです。その直後、城の警備隊も到着したのですが、隊長と王女が是非国王に会って欲しいと仰って。王女の命の恩人にお礼を言いたいと」

「それで、まさかノコノコついてたってわけ！？」

「ええ」

すぐに肯定するみゆり。リーナは啞然とした。

「ばっかじゃないの？その二人」

リーナにとって人間とは、警戒しておくにこしたことはない存在だ。

どんな人間かもわからないのに、国王という権力者に会いに行くなんて、正気の沙汰とは思えない。

「彼らの名譽のために言っておきますけど、お礼を受け取りに行つたではありませんわよ」

みゆりはリーナが、彼らがお礼に釣られたことを非難していると思つたようだ。

「そうじゃなくて。今まで隠してきた私達の存在を、そんな簡単にばらすなんて何考えてんのつて話！」

「ですから、セラフィさんが直訴したのですわ。“妖精達にも住みよい国を作ってください”と。もう狩られていく同胞を見たくはないと。だからこそ命を賭けたのです」

もしかしたら、自分は国王への無礼な発言で処刑されるかもしれない。だけどそれでも。

「彼女の気持ち为王様に届いたのです。王は娘の恩人に誠意を尽くすと約束してくださいました。けれどそのためにはお互いの存在に理解が必要だと」

「だから、共存の道を？」

「ええ」

心の中で彼女の気持ちを思う。例え死ぬことになつても、守りたかつたもの。それは共に生きてきた仲間。

彼女は強く気高い女性だ。

「…同じ天使として、会つてみたいわ。その、セラフィさんに」

「セラフィさんなら、望月さんの大学時代の教授さんと暮らしていますわ。昨日言つた、遺跡調査に行つた方の一人です」

その事実を聞いて、リーナは考えこまずにいらなかった。

「これは憶測だけど…。その遺跡調査に行つた六人と天野君は、伝説の聖戦士じゃないかと思うの。そしてそのセラフィも、何か関係していると思う」

「ちよつとそれつてこじつけ過ぎないですか？みゆりさん達はともかく、教授達はそれを証明するものが何もないんですよ？」

「だけど到もみゆりも望月も博も、その三人と知り合いなんだろう？どこかで繋がってるって考える方が自然じゃないか？あくまでも天使達の思想——輪廻転生を信じるならだけど。とにかくついでだし会いに行こうぜ」

「それは構いませんけど…。あ、でもセラフィさんに会ったのなら、“赤い月”に行った方がいいかもしれませんわ」

「赤い月？」

「王女を助けた、もう一人のルーファウスって炎妖精さんが経営するアクセラ屋ですわ。セラさんはよくそこのお手伝いに…」
みゆりを除く三人の顔が凍りついた。

「——今、何てった？」

ルシフェルが顔を強ばらせる。

「ですから、赤い月に…」

「ルーファウスが、そこにいるって!？」

「え、ええ…。でも私達が会ったのはセラフィさんでは…」

まさか、彼がこんな近くにいるなんて。ルシフェルの兄であり、ノエルの生まれ変わりである彼が。

「だとしたら、ますます行かないわけにはいきませんね」

「……………」

到の言葉にも、ルシフェルは黙ったままだった。リーナはなんと言えればいいのか解らなくなった。ここで彼と会わせるには、余りにも酷ではないだろうか。

「ルシフェル…」

やっとそれだけ声をかけると、彼は小さく笑った。

「大丈夫だよ。兄さんが何を考えてるかは解らないけど…、オレの兄さんだってことは変わらない。だったら、ここで逃げるわけには行かない…」

そう言っ拳を握りしめる彼は、やはり大人だと思った。

「うん、でもね、一人で頑張らないでよね。あんたにはあたしや天野君や、みんながいるんだから。もっと頼って、泣き言でも何でも

言いなさいよ?」

「…ああ、そうだな」

ルシフェルの笑顔に少し安堵するが、これからのことを考えると不安になる。果たして私達がここにいる意味は何なのだろうか。

第五章 五大都市 ― 真由美編 ―

真由美は午前中優に武術の稽古を受けていました。このところ自分の無力さをひしひしと感じていたからだ。

綾子やみゆりは西国一の剣士と名高い巧に剣術を教えられてきたし、友美は普段はともかく、ピンチの時はラファエルと人格が交代するので死ぬことはない。到も攻撃方法は変だが敵を見事に倒してきている。それに比べて自分は誰かに武術を習ったこともなく、一番戦闘能力は低いのだ。

午後になって道場にリーナ達が迎えに来た。望月なる人物に会いに行くためである。未だ手の放せない綾子には事後報告になってしまったが。

優の道場から徒歩で十分とかからずに彼の家に着いた。

真由美は思わず「でかつ」と叫んだ。彼の家に来たことのないというみゆりも口をぽかんと開けている。学生時代何度か彼の家に来たことのあるという到だけが平然としていた。

昨夜到が「彼は武術都市に一人暮らししている」と言っていたので、つきりマンションかアパートを借りているのかと思っていたのだが、予想に反し彼の自宅は一軒家だった。しかも世間一般の家よりかなりでかい。真由美や到の家の二倍はあるだろう。家に入る前に門があり、レンガ色の壁をしたいかにも上品な造りの家。その周りには立派な大木が数本立っていた。どう見ても一人暮らしには広すぎる。

「この家は元々、彼が家族と住んでいたんですよ。今はみんな地方で働いていないんですけど」

だったら引き払ってもっと小さい所を借りればいいのに。維持費と掃除が大変そうだ。無駄に広いとはこのことを言うのだろうか。到がインターホンを押すと、若い男が出てきて門を開けた。

「来たか。とりあえず上がった」

この男が望月（下の名前は幸広というらしい）なのだろう。しかし――自宅もそうだが、彼自身も真由美の想像からかけ離れていた。到より頭が良いと言うから、黒髪眼鏡のいかにもインテリという男かと思ったのだが、髪は明るい茶髪だし、眼鏡もかけていなかった。顔立ちも確かに知性は感じられるが、がり勉には見えない。自分の父は不良？茶髪学者だったが、みゆりが尊敬していることからしてもそう変な人間ではないだろう。

適当に座るように言われ、リビングのソファに腰掛ける。当然ながら中も広い。一階は吹き抜けで、天井には大きなシャンデリアがある。リビングにある大階段から二階に行けるようになっていて、見上げると部屋が五つほど見えた。社長令嬢のみゆりが自宅として使っているスペースにも勝る規模だ。一体彼の親は何をしている人なのだろう。もしかして、みゆりよりもすごい金持ちの御曹司なのだろうか。

友美は着いてすぐ床に寝転がって眠りについた。時々倒れるように、そして死んだように眠る友美が心配だ。

みゆりはというと、コーヒーを入れにキッチンに行った幸広を手伝っている。それを見て到がニヤニヤした。

「いやー、望月君もやりますよね」

「何がだ？」

幸広がコーヒーを持って現れた。到がわざとらしく何でもないという顔をする。

「いえ、別に。それより博さんのことですが」

「ああ、おまえの電話では妹が来るという話だったが…。君がそうか？」

「えっ？あ、うん、そう」

突然自分に話題を振られ、真由美は慌てて答えた。

「…そうか」

幸広の微妙な沈黙が気になった。だがみゆりが残りのコーヒーを持ってきたことで、その疑問はすぐに頭から消え去ってしまった。

「博さんの行き先をご存知ですか？」

「西の島に行くと言っていたが」

西の島というと千年前天界があったと言われる場所だ。兄はそんな所まで行っているのか。

「ところで望月君。ロッドを持っていると聞いたんですが」

「ああ…。ホーリイロッドか。その存在を知っているということは、おまえが聖戦士であることに間違いないな」

幸広は淡々と話す。

「博さんから聞いたんですか？ 聖戦士のこと」

「いや。ロッドと共に千年前の歴史を綴った史書が残っていたんだ。私の祖先であり、前世のスルーフが記した物らしいが…。あれほど詳しく書かれている史実はまずないな」

「ええっ！？ そんなのがあんの！？」

自分も父からロッグの大半は聞いていたが、それよりも詳しい事実を彼は知っているというのか。

「何で教えてくれなかったんですか！ 君ばかり知っていてズルイんじゃないんですか！？」

到が憤慨する。真由美でさえ内容が気になったのだから、学者の到は余計なのだろう。怒り方がいつにも増して理不尽な気がする。

「大体、先生方とも調査に行ったそうじゃないですか！ 同じ聖戦士だっというなら、何で僕だけ別行動なんですか！？」

そんなこと言われても望月が知るわけないだろうに。――が、彼はその理由さえも知っているようだった。意味ありげに一言、

「……おまえは、あっち側の人間だからな」

そしてコーヒーを一口飲んだ。

「…“あっち側”？」

「いや…。何でもなし。それより旅に出るのなら私もついていこうかと思うんだが…。回復魔法が使えるから、少しは役に立つだろう」
幸広は到にろくな説明もせず、早々に話を切り替えた。

「まあ！ それは心強いですわ！」

「今回のことも色々知ってそうだしな」

みゆりとルシフェルは手放しで喜んだが、真由美は彼が何故旅に出ようと思ったのかわからなかった。

「それは嬉しいけど、なんでわざわざ？義務感でなら来ることないよ」

この旅には命がかかっている。だからこそ、義務感で来るのなら良くないと思ったのだ。

だがまたしても彼は意味深なことを言った。

「そうじゃない。理由は色々あるが…、あえて言うなら約束したから…かな」

「約束…？誰と？何の？」

「今はまだ言えない。だがこれは私の意思だ。私は義務感なんかで命を賭けるほど、物分かりは良くないからね」

彼が何をどこまで知っているのかはわからない。けれど彼は信用出来る。それはただの勘かもしれないけれど、それでも彼を信じようと思った自分を信じる。

「私もいいよ」

「僕も勿論OKですよ。消された歴史について、全部教えてもらいますから覚悟してください！」

「…まあ、ぼちぼちな」

幸広は少し間を置いて答えた。

第五章 五大都市 ―ルーファウス編―

あの日王女を助けたのは偶然だった。勿論セラフィと会ったのも。王に呼ばれ、褒美に何が欲しいか聞かれたとき、セラフィは言った。

『褒美など何も望みません。ですがもし、王様が少しでも私達の存在を認めてくださるなら…私達の身の安全を保証して下さい』
彼女の意志を讃えた眼差しは、リズとよく似ていた。だからなのか。思い出してしまった。あの時のこと。

「…引き留めては、くれないのね」

リズの、藤色の緩やかに流れる髪が、風をまといふわりと揺れた。だがそれは消えそうなほど小さく、微かで。

「…引き留めて欲しかったのか？」

私がそう返すと、彼女は寂しげな顔を見せた。

「…意地悪な人ね。あなたって」

その寂しさは、誰に向けられたものだったのか。彼女自身？私？それとも。

「……ス様。ルーファウス様？」

シヴァの声で現実に引き戻された。

「どうかされましたか？」

「いや…。昔を思い出していた。いくら思い出したところで、あの頃には戻れないのにな」

「そりゃそうだ」

いつの間に来たのか、時天使のネサラが壁によしかかって立っていた。紺色の髪に黒い翼、表情の読み取りづらい細い目が特徴の男だ。

「いきなり現れるとは、趣味が良くないな」

「何を今更。オレはそんなことを言われるためにここに来たわけじゃねえぜ。用件はわかってるな？」

そう言うと、男にしては少し長めの髪をかきあげ、不敵に笑った。

「…もうすぐだ。既に闇の封印も導きも、彼らの手元にある」

「ハッ。あんな雑魚相手にそれが必要とはな。お笑いだぜ」

ネサラが嘲弄した。シヴァと共に話を聞いていたライラが眉根を寄せる。

「雑魚って？」

ライラはクロウと面識はない。あの頃私に仕えていたのは彼女の祖父のラムウだった。

「あんな奴、俺なら二秒で消せるぜ？ラファエルやシエルが倒せなかったのは、変に負い目を感じちまったからさ」

「優しすぎたってこと？」

「優しい？フン、くだらねえ。そんなモンで世界が救えるか？愚かしいにもほどがあるぜ。そんなんだから、なーんも知らずに死んじまうのさ」

ネサラの言うとおり、彼らは何も知らない。だが知らないことで道を繋げることが出来る。だからこそ、ラファエルに真実を知らせることは出来ない。

「…史書を持つ幸広が、うまく事を運んでくれるだろう。あれには大方の真実と計画が書かれている。おまえもそのうち会いに行ったらどうだ？」

「おい、そりゃ嫌味か？俺があいつが気に食わないの、知ってたと思っただんだが」

眉間に皺を寄せるネサラ。

「君が気に食わないのはスルーフであって、幸広ではないだろう。」

スルーフだつて良かれと思つてしたことなんだ。あまり嫌つては可哀想だよ」

「ふん。昔からアイツをひいきしてたおまえに言われたくねえな」ネサラはますますふてくされた。しかしこればかりはしょうがない。彼のスルーフに対するムカつきは逆恨みですらない。にも関わらず、嫌がらせをされているスルーフの肩を持つのは当然だ。そもそも、昔からスルーフをひいきしてきたつもりもない。

「まあいい。おまえの弟がもうすぐ着くぜ。俺はもう帰るから。せいぜいがんばんな」

彼は私を一瞥し、過去に帰つていった。

ライラがシヴァに詳しい説明を求めている。その二人をぼーっと眺めながら、よくネサラをたしなめていた女の姿を思い出した。

第五章 五大都市 ―ルシフェル編―

ルシフェルは到、リーナ、みゆりと共に、兄がいるという“赤い月”へ向かった。トランスポートで物質都市へ行く。だんだん緊張が高まってくる。

今、真由美は優にもう一度稽古を付けてもらっているし、幸広は旅に出る前に片付けることがあると言って家に残った。その片付けることがなんなのか、全く思い当たらない。“誰かと約束”して旅に出ることを前から決めていたのなら、今更片付けることなど何もないだろうに。

ただ、彼が仲間になったことは本当に心強いと思う。史書があるのなら、綾子を救う方法がわかるかもしれない。わずかではあるが希望が見えてきた。

「着きましたわ」

多くの店々が並ぶ通りに“赤い月”はあった。外観は一軒家のようにだが、人の出入りの激しさからすぐに店だとわかった。

中に入ると、天使とパートナーの人間と一緒に大勢買い物に来ていた。しかしその中に買い物客でない女天使を一人見つけた。

――あの接客してる女がセラフィか？

紫の髪と瞳。雷天使だ。

「あ、いましたわ。セラフィさん」

みゆりがその女に声をかけた。やはり彼女がそうらしい。

「みゆりちゃん？どうしたの？あ、その人たちお友達？」

「紹介しますわ。こちらは望月さんの同級生で、天野到さんです。それから妖精のリーナさんとルシフェル」

「そうなんだあ。そう言えば千慧ちゃんから聞いたことあるよ、天野君のこと」

「えっ。先生は僕のことなんて？」

先生とは、昨日言っていた大学時代の助教授だろうか。

「えーつと…、いかにも理工学部生といった感じの生徒だったって」
「…………。理工学部生は、みんなそうなんじゃないですか？千慧先生の独自の理論や思考は相変わらずみたいです」

「あははー…。スイフトちゃんもなかなか大変みたいだよ」

セラフィは聞き慣れない名前を口にした。

「スイフトさん？…どなたですか？」

「今千慧ちゃんと住んでる地天使だよ」

「へー…。あの千慧先生が、よく承諾しましたね」

「それがね、尊敬してる人に頼まれたんだって。それによっぽど彼女が気に入ったみたい」

「そうなんですか。僕も今度、久々に千慧先生を訪ねようかな」

「そうだよー。望月君と一緒においでよ」

セラフィが到を見てニコツと笑った。人の良さそうな笑みに性格が滲み出ている。

「望月君とも親しいんですか？」

「うん、私久美と暮らす前、城で王女の話し相手務めてたの。望月君はその頃王女の家庭教師してたから、よく会ってたんだ。久美に紹介してくれたのも彼だしね」

家庭教師？到の話だと精神科医だったはずだが。

「家庭教師、ですか？」

到もきょんととして聞いた。

「副業みたいなものよ。でも最近じゃあそっちの方が名が売れてきてるみたい。カリスマ家庭教師って。そのうち転職したりしてね」

「…何なんだ、そのカリスマって」

「アイドルじゃあるまいし…。てゆーか、女心わかんないから精神科医に向いてないのかもよ？」

「家庭教師になんてなったら、他の女の子に目を向けてしまうかも…！私が一番お慕いしている自信がありますのにつ！」

「あははっ。望月君がロリコンでもない限り、中学生を相手にするなんて有り得ないですよ。彼、今年で十八なんですよ？」

「まあっ！私が子どもだと言いたいんですの！？」

到とみゆりが言い合いを始めた。みゆりは確か今年で十四と言っていた。それを考えると到の意見ももっともだと思う。

「みゆりちゃん、落ち着いて。何か用があつたんじゃないの？」

セラフィが割つて入る。みゆりは本来の用件を思い出したようだ。

「そうでしたわ。ルーファウスさんにお会いしたいのですけど……」

「ああ。彼なら二階の部屋にいるよ。案内してあげたいけど、店がこの状況だから……」

「気になさらないでください。私達だけで行きますから、セラさんはどうぞお仕事を続けてくださいな」

セラフィと別れて二階へ上がる。三つある部屋のどこにいるのか迷ったところで、一番左の部屋から兄本人が出てきた。

「やあ。そろそろ来る頃だと思っていたよ」

「……兄さん……」

「連れの方も中へどうぞ。積もる話もあるだろうから」

兄は微笑んで自分たちを中に招き入れた。部屋に内鍵をかけ、突然人間サイズの姿になった。羽も翼に変わっている。

「な、何ですの！？」

「さつきの姿じゃ、お茶も出せないからね」

天使は天界にいる時やエネルギー源の魔石を持っている時は、人間と同じ大きさになる。そして羽の代わりに翼が生えるのだ。もっとも、兄が本当にノエル生まれ変わらなら、持っているのは星の力ケラかもしれないが。部屋のどこかに隠しているのだろう。

ルシフェルが部屋を見渡す視線に気付いたのか、彼は棚の上から力ケラを持ってきた。

「力ケラを見たいんだろう？ほら、これがそうだよ。綺麗だろう？まあ、君たちは見ることに出来ないけど」

兄の口調は以前と少しも変わらなかった。口調だけじゃない。立って髪も、伏し目がちなところも何も変わっていなかった。けれど、前とは何かが違っていた。それが何かは解らなかったけれど。

「……やはり、あなたはノエルさんだったんですね…」

「…なんで、洞窟を襲った？」

今、こうして兄が生きていることは嬉しい。それでも、それを仕組んだのは他ならぬ兄だ。

「ライラから聞かなかったかな？計画を実行するためだよ」

「……………!!」

ライラの言っていたことは嘘じゃなかったのか。

「計画って…。ラファエルの記憶を戻すことか？」

「それもあるけど他にも…ね」

「他に…？」

解らない。兄が何を考えているのか。

「ここが安全だと思っているのなら、それは間違いだよ。もういくらもしないうちに、それは崩れる」

「どういう意味ですか？」

みゆりが尋ね終わるか否かで、乱暴にドアを叩く音がした。

「ルーファウスさん！大変だよ！三大兵器が全部作動しなくなったみたいなの！」

「なんですって！？」

ばかな。機能停止だって！？誰かの陰謀なのか？…まさか。

「やれやれ…。結局お茶は出せずじまいだったね」

兄は妖精の姿に戻り内鍵を開けた。

「…じゃあ、私は店に結界を張って、セラフィと一緒に住民をここに非難させる。街に入り込んだ魔物の始末は任せるよ」

「待てよ！まだ話は…」

「ルシフェル！人々の救助が先です！早く！」

外からは街人が叫びうるたえる声が聞こえてくる。おそらく彼らには魔物と戦える力はないだろう。

「ちっ。わかってるよ！」

ルシフェルは到の後に続き、外に出た。

第五章 五大都市 ― 幸広編 ―

到達が赤い月に向かった後、幸広は絨毯の上で寝そべっている友美に毛布を掛けた。

「解離性同一性障害と酷似しているが、人格が想像上のものではなく、現実に存在していたことからして、全く異種のものとも言えるな……」

誰に言うともなく呟く。

おそらくこのようなケースは人類の歴史上で最初で最後となるだろう。

しかし、どのような病名でどのようなケースだろうが、問題はそんな事じゃない。

問題は、ラファエルの“記憶”と“人格”が友美に与えている影響だ。

ファエルの時の強いストレスからPTSD（トラウマ）になり人格を二つに分けたのだが、反動で友美は実年齢よりも退行しているし、二つの人格のギャップが激しいほど体にかかる負担も大きくなる。

昨夜の電話で到から聞いた話によると、思考がラファエルになるといつも“力”を使っていたようだ。人格の交代でさえ一大事なのに、その上魔石も無しに精神力を放出するなんて。

魔石の類は単に魔力を上げるだけではなく、精神エネルギーを放出するための媒体でもある。幸広もそうだが、大抵の人間は魔石がなければ魔法は使えない。（魔石があっても適性がなくて使えない者もいるが。）

だが、適性のある者の中でも特に際立った者が稀に現れる。魔石がなくても魔法の使える人間が。それが前世の神――ラファエルであり友美である。

それでも媒体がなければ心身共にかなり消耗する。今現在友美の体

に蓄積した疲労がどれほどのものか察するに余りある。

実際、こうして睡眠障害という形で体に支障を来している。幸広は友美の寝顔を見ながら途方に暮れた。

本当なら友美が主人格のはずなのに、一日の大半を眠り続け、起きている時の状態も不安定だ。これは全くの予定外だった。自分にとっても。そしてノエルにとっても。

けれどもラファエルの辿った人生を思えば、こうなったのも仕方のないことだ。大体想定していたとして、ノエルの計画が変わることなどないのだろうし。彼はきっと“厄介事が一つ増えた”くらいにしか考えていない。

（困ったものだ…）

幸広は頭を悩ませるが、すぐに思考を切り替えた。

ラファエルと友美の人格の同一化は今のところさして重要でもない。少なくとも今回の戦いにおいては。

（まずは仕事を片付けなくては）

踵を返して玄関に向かう。けれども外には出られなかった。

「どういうつもりだ」

後ろから鋭い声がしたからだ。

幸広は振り向きざまに尋ねた。

「あなたは…ラファエル様ですね」

「…人の質問には簡潔に答えろ」

『彼』は上半身を起こし、怒りをはらんだ口調で言った。

「…質問の意図を図りかねるのですが」

「とばけるな。おまえはマリクとは違う。そのおまえが何故ここにいる！」

殺気を露わにし、返答如何によつてはただではおかないと言外に言われ、幸広は苦笑した。

「随分嫌われたもんですね。気持ちはわからなくもないが、私も聖戦士の一員。あなたが思っているほどバカじゃない」

「どうだか。史書を持つおまえを信用出来ると思うか？あれには何

が書いてあった？答えろ」

ラファエルが詰め寄る。チエイニーとは違い、欺けない。

「知らないとも思っていたか？」

「いいえ。ですがそこまで知っているのなら、わざわざ聞く必要もないと思うんですが。“第二の戦いが始まる”といえば、全てわかるはずですよ」

「…何？そうか、それで…。わかった、今はおまえを信じよう。だがもし妙なことをすれば…。わかってるな？」

彼は睨むように幸広を見つめた。

「その時はどうぞ好きにしてください。要らぬ心配とは思いますが」
「ならばもう行け。私は少し休む」

ラファエルは毛布に潜り込むと、すぐにすうすうと寝息を立てた。

十分後、幸広は学術都市の制御タワー内部にいた。

学術都市は千年前に魔道学校や魔道科学研究所があった場所だ。戦いの後、国立大学や研究所として発展してきた都市である。そして制御タワーは千年前から存在している建物で、俗に三大兵器と呼ばれるBFS、迎撃システム、トランスポートのエネルギー制御の役割がある。建物自体は何度も改修しているが、中の制御システムを調べ、疑似エネルギーを作ったのは最近のことだ。

旅に出る前に調査をしておこうと思ったのだが、こなきや良かったと後悔した。

機器の至る所が壊れている。

（なんなんだこれは…っ）

三つ目の機器の修理に取りかかる頃には、幸広の怒りは頂点に達していた。

（なんでこんなに壊れてるんだっ！しかもメインシステムならまだ

しもサブシステムがつ！）

メインシステムは大概作りが複雑で直しにくいのだが、サブシステムは少し注意すれば割合簡単に直せる。それを三つも四つも放っておくということは、疑似エネルギーが出来てから一度も監査に入っていないことになる。

（この分じゃ、メインの方も大して期待出来ないな…）

タワーの一、二階は主にサブシステムがあり、三階にはメインシステムがある。しかし入って三十分は経つのに幸広はまだ一階をうろろしていた。これではいつになったら当初の目的を果たせるのか、解ったもんじゃない。

（この動力炉…バッテリーが外れてるな。この落ちてるのがそうか…）

一人悶々と修理をしていると、突如ビープビープと警告音が鳴り響いた。すぐに部屋にあったサブコンピュータでアラームを止め、原因を調べる。画面に現れた文字を見て、幸広は焦らずにはいられなかった。

「動力エネルギー異常有り」

（なんとというタイミング…。調査をしに来た矢先に壊れるとは。急がないと街中に魔物が溢れてしまう…）

幸広はサブシステムの修理を一時中断し、三階へ向かった。サブシステムが壊れても、メインが動かせば何とかなるかもしれない。しかし、起動エレベーターが壊れていたのでまたしても修理に時間を食ってしまった。そんなわけで、三階に着いたとき、疲れの余りまた怒りが再燃していた。

（なんで私が機械の修理なんぞしなくてはならないんだ…。私は精神科医だぞ！？どう考えてもおかしーだろがつ！）

幸広は操作はともかく、発明や修理などという細々した作業がキライだった。手先は器用な方だし、大学で得た知識もある。得意と言えは得意な方かもしれないが、なんとというか性に合わない。特に数学なんか、公式を見ているだけで頭痛がしてくる。どちらかという

と文章から心情を読み取ったりする方が好きだった。“何となく”理工学に入ってしまったことを後悔した数は、片手の指では収まらない。

それでも今こうして大学での授業が役に立っているのだから、全くの無駄ではなかったわけだ。なんだか皮肉な話ではあるが。

エレベーターの修理ごときで腹を立てている場合じゃない。メインシステムの修理が残っている。小規模ではあるが爆発が起きたようで、エネルギー装置を中心に焼け崩れている。

（これは…スペアのパーツがなければ無理だな。どこかにストックがあればいいんだが…）

それらしきものを探しながら、今度は口に出して文句を言った。

「こういう仕事は発明オタクの到にさせとけばいいんだ。大体、定期的に監査に入るのは科学者の義務だろが！！怠慢もいいとこだ！」

「あれえ？その声、もしかしなくても望月君ですか？」

不意にした声に驚いて顔を向けると、エレベーターの前に本人が立っていた。今降りたばかりらしい。

「到！？おまえルーファウスの所に行ったんじゃない？」

「三大兵器機能停止の報せを受けたので、魔物の相手をルシフェル達に任せて、この様子を見に来たんですよ。おそらく、三大兵器の動力エネルギーは魔石だと思ひまして。さつき機能停止したトランスポートに魔石を持って入ったら起動したし、現在使われている疑似エネルギーは過去に使われていたものと97.8%しか一致していない…。人為的に作れないエネルギーといえば、魔石くらいでしょう。何せ魔石を作り出した光玉は、元々地球には存在しない物質だったんですから」

「ああ。史書にもそう記されていた。だから調べに来たんだ。粒子の中の0.01にでもマイナス要因があれば、幾可異性を生じたり、脱離反応を起こして爆発…なんて恐れもあるからな。結局間に合わなかったが…」

到は妙な顔をした。

「…にしてはおかしいんですよ。0・01のマイナス要因でも爆発するんですよ？2・2%も違う割には被害が小さいっていうか…。一年半も何も起きなかったなんて、変ですよ。普通、もっと早くに支障が出ると思うんですけど」

到の言葉で、彼も同じことを言っていたのを思い出した。

「…あの人が、動いているからな」

「あの人？ルーファウスさんですか？」

「違う。それは——」

言いかけたところで、どこからかヒラヒラと一枚の紙切れが到の頭に飛んできた。

「何だソレは」

「知りませんよ。ん？でも何か書いてあるなあ。——『和萄十一年七月十二日、和萄のドラえもん参上！』…義信博士ですかね？」しげしげと紙を眺め、幸広にも見せる。

「いや…『和萄のドラえもん』は博のハンドルネームだ。それにこの日付…丁度アイツが五大都市に来てた頃だな」

「…なんか、物凄く血の繋がりをを感じる親子ですよ。激しく意味不明なハンドルネームだし…。あれ？そういえば博さんもそうですけど、君、どうやってここに入っただんですか？」

制御タワーは科学者しか入れないようにセキュリティが引かれている。つまりそれだけ重要な施設なのだ。

「転移魔法を使った。本当はセキュリティをおまえに解かせて後ろについていくつもりだったんだが、予定が狂った」

「ちょ、ちよつと望月君！？それってれっきとした犯罪じゃないですか！僕はてつきり上層部に許可でも得て…」

「そんな悠長なことやってられるか。それにしても、おまえがいないせいで私が機械の修理をする羽目になって散々だった」

幸広はパーツのストックを探しながら到に当たった。到は眼鏡で装置の故障の詳細を調べながら、呑気に答えた。

「ああ、そういえばエレベーターも修理した形跡がありましたね。」

けど転移魔法が使えるなら、わざわざ直す必要なかったんじゃない？」

「あれは高等魔法だ。今の私じゃ、日に二回が限度だな。ここに入るのと脱出時分しか使えない」

「はあ、なるほど。まあとにかく直してくれて助かりましたよ。おかげで僕もまっすぐここまで来れたし。いつ爆発するかしれない塔内に入る科学者なんかいません。だからほら、その辺ほったらかしだったでしょう？それなのに望月君よく来ましたね。勇敢というか命知らずというか……」

到の最後の言葉に少しムツときて言い返す。

「バリアを張るぐらいは出来るし、大した被害は出ないことは解っていた。だからこそ修理をおまえに任せて、私は付き添うだけのつもりだったのに」

「ルーファウスさんに会う予定がなければ一緒にできたんですが。」

そういえば……結局黒崎さんを守る方法、聞けずじまいでした。望月君は何か知ってます？」

到は意外な問いを寄越した。彼ならもう気付いていると思ったのだが。

「そのことなら何の問題もない。それよりも重大なのは……」

言いかけて口をつぐんだ。目の前に突然チェイニーが現れたからだ。

「あ、二人とも来てたのか」

自分と同じで転移魔法を使っただろう。

「BFSが機能停止したって聞いたから、様子を見に来たんだ。やつぱ魔石を残しておかなかったのは失敗だったかなあ」

説明しながら再生の魔法で爆発したエネルギー装置を新品に戻す。

こういとも簡単に直っていくのを見ると、さっきまで自分が修理に費やした時間が物凄く虚しい。

「魔石なら持ってますよ」

「私もあるが」

二人が同時に差し出すと、チェイニーは首を傾げた。

「到にはやったけど、望月にやったっけ？」

「…とある経路から入手した」

「闇ルートみたいだな」「望月君って意外とワルですね」

到が言い終わるか否かで、腰に下げていたロッドで頭を小突いてやった。

「おまえは黙ってる」

「痛いじゃないですか!」

ふくれっ面をする到を見て、チエイニーがぶつと吹き出した。笑いをこらえながら

「わ…悪い…。因果応報ってあるんだな…。はははっ」

最後は結局笑い出す。何がそんなに面白いのかよくわからない。

「と、とにかく魔石なら俺も持って来てるから、おまえらはとっつけよ」

彼は懐から魔石を取り出した。二人の石が手のひらの半分ぐらいなのに対し、それは裕に片手くらいはあるかと思われる大きさだった。それを直したエネルギー装置の上に置き一息つく。

「これでよし」

そんな様子を見ていた到が、チエイニーの横で、ん?と顔をしかめた。

「そういえば、二人とも知り合いだったんですか?」

「俺は早い内から地上に降りて聖戦士を捜してたからな。望月とは一番最初に逢えたんだ。同時十二歳だった望月見て正直不安だったんだけど、六年経っていい男になったな」

「それ、なんか違う気が…」

「しかも、不安だなんておまえがそれを言うか?」

「ああ、それもそうか」

チエイニーとラファエルが神の座についた年を思えば、決して特別なことじゃない。彼らは子どもだった。あまりにも幼かったのだ。

「あ、そうだ。フューカの気配を追ってたら、西の島に渡る橋付近に反応があつてさ。博も多分そこにいると思う。一人で魔物と戦っているならそんなにすぐには先に進まないと思うけど、あそこは魔

物の本拠地だし一人じゃ危険だ。いいか、リミットは一時間。それまでに全員出発の準備をして望月んちに集まっとけ。そしたら転移させてやる。俺はその間もう少しここを調整してるから」

チエイニーの報せに、幸広は内心ちつと舌打ちした。

(…アイツの言ったとおり、あの人の力もここでは及ばない…。だとしたらやばいな…)

「わかりました。望月君、急ぎましょう」

「ああ」

二人はタワーを後にした。

第五章 五大都市 ― みゆり編 ―

みゆりはリーナやルシフェルと共に、迫りくる魔物を倒していた。突進してくる巨大な魔牛に、正面から相對する。剣を構え、刹那の速さで胴体を斬りつける。

その傷口を狙ってリーナとルシフェルが合体魔法を發動させる。

「エルファイアー」

「エルウィンド！」

魔法は見事的中し、魔牛を死に至らしめた。

断末魔の叫び声を上げながら倒れゆく生命を見て、自らの持つ剣の力と運命の大きさを感じずにはいられなかった。

剣を鞘に収め、空を見上げる。血生臭い地と化したこの国で、何十年、何百年経つても変わらぬもの。果てなく続く青空。この空のおかげで、私達は救われているのかもしれない。

（さてと。いつまでもこうしていられませんわ。他にも魔物がいないか確認しなくては）

みゆりが視線を地上に戻すと、先ほど倒した魔物を挟んだ向こう側に見知らぬ男が立っていた。それは、色々な意味で有り得ない光景だった。

みゆりが空を見上げるまでそんな男はいなかった。ほんの数秒の間にみゆりの前に現れたのである。その上、彼の格好は奇怪極まりなかった。紺色のローブを身にまとい、頭にはフードを被っていて顔の判別が出来ないのだ。体格や、微かに見えるあごひげで男だとわかるくらいのもので。

（怪しい…っ。怪しすぎますわっ！なのに…こんなことって）

おかしい事に、みゆりは彼を知っているような気がするのだ。

顔もわからないのに。

男はどこを見るでもなく、ただ西を向いて立っていた。しかし突然くるりとみゆりの方を向くと言った。

「…そうか。君が呼んでくれたんだね」

「え？」

「久しいね、デイジー。どうだい、こっちは。私の方は全然だめさ。命の代償はやはり大きかったようだ」

何を言っているのかさっぱり解らない。だが、デイジーとは前世の自分ではないだろうか。

「あの…あなたは、誰なんですか？前世の私を、知っているんですか？」

「ああ、そうか。君は覚えていないんだっただね。すまない、つい懐かしくてね」

残念そうに声を落とす。やはり彼は前世の自分を知っているらしい。

「私は覚えていないって…どういう事ですか？」

「君は聖戦士だ、それ以上でもそれ以下でもない。つまりそういうことだ」

「……？」

「ノエルに伝えてくれないか。これ以上おまえの好きにはさせない。そっちがその気なら私にも考えがある、と」

「え？あの、それって…」

みゆりの問いを遮るように、突風が起こった。思わず目をつぶり、そして再び開けた時には既に男の姿はなかった。

「ウソ…」

呆然と立ち尽くすみゆりを、少し遠くから到が呼び止めた。

「あ、いたいた。みゆりさん！」

走り寄った到は自分を捜し回ったせいか、息を切らせていた。

「大変なんですよ。博さんがもう西の島付近まで行っているらしくて。チエイニーさんの転移魔法で移動するんで、望月君ちに戻ってください。僕は黒崎さん連れてきますんで。ほら、ルシフェルとリーナさんも」

「はいはい、戻ればいいーんでしょ」

「わかりましたわ」

みゆりは先ほどの男の事はすっかり忘れて、どうせなら望月君さんが来てくれれば良かったのに、などと思いながら、言われた通り望月家へと向かったのだった。

第六章 想いを胸に ―リーナ編―

リーナ達は、チェイニー転移魔法で西の島へ渡る橋付近に来ていた。決戦の時が近いことは解っている。だが問題は、綾子の持つクロスペンダントだ。このまま彼女をクロウと対面させて、いいはずがない。

「気にしているのは綾子のことか？」

リーナの胸中を察したように、友美が言った。

――いや、正確にはラファエルが、だった。

「…気づかないか？ペンダントの中心の宝玉から感じる、何か別の気に」

「え？」

何のことだろう。宝玉からはうつすらと魔力が感じられるが、それ以外に何かあるということなのか。

「解らないのならいい。とにかく、おまえが心配する必要はない」
いつになくムスリとした表情のラファエル。

「…？どうしたんですか？」

「気に入らないだけだ。少なくとも今までは『私』の意志で人格交代をしてきた。だが今回は違う

言われてみれば、今まで『友美』から『ラファエル』に交代した時、必ず自分や味方が窮地に陥っていた。しかし、今はそういった状況ではない。

「…フン。だからアイツは信用出来ないと云うんだ」

彼は幸広を物凄い形相で睨んだ。けれどもそれも一瞬のことですぐにフィツと橋に向かった。

橋は長くて立派だった。辿り着く先が見えず、どこまであるのか全く解らないほどに。二列になって最前列と最後列の守りを固めながら進むことにする。

「頭は真由美とみゆり、尾は綾子と幸広だ。間接攻撃の出来る到と

私は間に、天使二人は適当に隠れて陰から援護。いいな？」

ラファエルが指示を出す。そして到の魔石を借りて、警戒態勢は万全。

「では行くか」

一行が橋を渡り始めると、待ち伏せていたかのようにすぐに魔物に挟みうちされた。

今まで戦ったことのない強敵揃いだ、こちらも負けてはいない。

真由美は確実に優との特訓の成果を出しているし、みゆりの持つ聖剣の威力と剣術には目を見張るものがある。幼いながらも巧の下で修行をしてきただけはある。

一人旅をして多くの魔物を相手にしてきた綾子は言うまでもないし、到は昨夜のうちに新しい銃を開発したらしく、今までのものよりかなり派手なエネルギー弾を発砲している。

最も驚いたのは幸広の攻撃法だった。ロッドで敵を殴る——のはまだいいのだが、何故かそのロッドが伸びるのだ。

「どうなってるんだ!？」

隣で戦っている綾子も目を丸くする。

「ああ……。うまく念じれば伸縮自在なんだ。一応ちゃんとした理屈もあるんだが」

喋りながら、伸ばしたロッドを槍のように扱い攻撃していく。相当訓練したのだろう。突きが正確でしかも早い。

「説明が面倒だな」

「だろーな」

それだけ解れば充分だという綾子の後ろで、到が騒ぐ。

「理屈があるなら、面倒でもあとでちゃんと教えてくださいよ!？」
「そのうちな」

幸広は到の相手もそこそこに、次々と魔物を倒してゆく。ルシフェルも真由美の援護で敵に火球を放っている。自分も負けてられない。

綾子の後ろに隠れていたが、少し高めに空に浮く。そして綾子が相

手をしている毒蜘蛛めがけてエルウィンドを放った。と同時にルシフェルの声がする。

「危ねえ！！」

「え？」

声に反応し振り向く。その時リーナの視界に入ってきたのは、フレアビーストの吐いた炎だった。

（ダメ、避けられない！）

「——っ！」

リーナは覚悟を決めた。けれども体に炎が触れようとした刹那、横から突出された手がリーナを救った。

ルシフェルだ。

「くっ」

彼は自分の代わりに炎を受け、体中に火傷を負った。

「ルシフェル！」

「大丈夫か！？」

戦い終わった味方が声をかける中、リーナは口が震えて言葉が出てこなかった。

「平気だよ。見た目ほど酷くないから。リーナ、おまえは？怪我ないか？」

なんで。なんで私の心配なんかするのよ。私の代わりにそんな火傷負ったのに。

「……バカじゃないの！？今のは私の不注意で……、あんたが怪我する必要なんかなかったのに！」

「オレは炎天使だから、炎には耐性あるからいいんだよ！それに、もう嫌なんだよ。誰も助けられないのは……。大事な奴が傷つくのは」

「なによ……。私だって……、あんたが怪我したの見て、びっくりしたんだから……。怖かったんだから……。っ」

涙が止まらない。さっきの怖さを思い出したのか、ルシフェルが無事でほっとしたのか、それすら解らなくなってきた。

「泣くなよ……。あー、ちくしょう、困ったな……。あのさ、リーナ。」

この戦いが終わったら…伝えたいことがあるんだ。だから、お互い絶対生き残ろう。約束だからな」

今までも幾度か彼に助けられたが、今日ほど彼をかつこよく思ったことはなかった。おろおろしながら自分をなだめてくれた彼を、すごく好きだと思った。

「うん…、うん…。絶対勝とうね。約束だからねっ」

泣きじゃくりながらルシフェルの顔を見る。すると突然、自分の体が光に包まれた。

「な、なに！？リーナ、どうしたの！？」

これは、話に聞く天使への昇格だ。

「他人を愛し、守りたいと思う気持ちと、その為の力を得るそれ相應の身体的成長を遂げていれば、正天使として認められ更なる力が与えられる」

ラファエルが混乱する真由美達にそう教えた。

その後光はすぐに消えたが、新たに目覚めた力は感じた。以前より力がみなぎってくる気がする。

「ルシフェルは準天使だが、おそらく体の問題だろう」

「ガキだつて言いたいのか。ちえっ」

ルシフェルは不機嫌な顔で言った。

「そんなことないよ。さつき、めちゃくちゃかつこよかったもん。助けてくれてありがとう」

口にした後で、照れくさくなって赤面した。勿論言われたルシフェルも。

「……おまえなあっ…」

「…取り込み中悪いが…、火傷の手当てはしなくていいのか？」

二人の横で、幸広が冷静に尋ねた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2162h/>

星のカケラ ～戦いの幕開け～

2011年12月28日08時50分発行